

Published on June 1 , 2019

ISSN 2434-0049



国際協働学習 iEARN レポート (2018 年度) 国際協働学習実践集

Interactive Collaborative Learning with the World



iEARN 2018 USA ・ バージニア 国際会議&ユースサミット 全体会

特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構
(通称) JEARN

<https://www.jearn.jp/japan/>

国際協働学習 iEARNレポート（2018） 目次

番	題名	所属	報告者氏名	頁
	寄稿論文編			1
1	「アイアーンの国際協働学習」とは何か ～国際協働、プロジェクト学習、主体的・対話的で深い学び、グローバルコンピテンスの視点から～	実践女子大学 短期大学部	栗田 智子	2
2	小学校におけるテディベアプロジェクトの活用 小学生が意欲的に情勢にかかわるきっかけづくり	金沢星稜大学	高尾 好	8
3	テディベアプロジェクトと大学の支援	金沢星稜大学	清水 和久	12
4	2018年 iEARN Virginia 大会参加報告 ～iEARN 国際会議・ユースサミットの内容と意義～	金沢星稜大学	清水 和久	14
	プロジェクト実践編			21
5	「まちんと」と「アンネ」が遺すもの ～戦争体験からの次の世代への二つのJEARN事業～	Machinto -Hiroshima for Peace & ANNE FRANK	高木 洋子	22
6	防災世界子ども会議 NDYS 2017-2018 ～気候変動と私たちの住むまちの「防災・減災・復興」～	防災世界子ども会 議実行委員会	納谷 淑恵 岡本 和子	24
7	第2回世界大正琴交流大会 琴リンピック2018イン新潟 ～大正琴の輪は未来を拓く防災の輪 語り合えば信じ合える～	アイアーン大正琴 プロジェクト	廣田 元子	27
8	青少年ペンフレンドクラブ（PFC） ～海外文通の取組～	日本郵便株式会社 本社切手・葉書室	青少年ペンフ レンドクラブ	29
	小学校実践編			31
9	My School, Your School Project ～Tokyo2020の取り組みを入れて～	東洋学園大学	滝沢 麻由美	32
10	単級学級での国際交流の意義 単一的な見方を広げ、自分たちの良さを再認識する為に	金沢市立大野町小 学校	角納 裕信	34
11	第2回世界大正琴交流大会 琴リンピック2018 イン 新潟	Tokyo Kids	下村(江目) 愛	36
	中学校・高等学校実践編			39
12	2018年 iEARN Virginia 大会参加報告 ～生徒の主な活動～	アイアーン沖尚	上野 浩司	40
13	“Girl Rising Project”の実践 ～ 高3年生選択授業・「国際理解」～	啓明学園中学校・ 高等学校	関根 真理	42
	大学実践編（JEARN Youth Project）			45
14	Finding Solutions to Hungerプロジェクト Future Teachers によるパキスタンの小学生への課外授業の実践	明治学院大学	長谷川早百合	46
15	大学を拠点としたHoliday Card Exchange プロジェクト 短大生ファシリテーターと小学生との国際協働学習	実践女子大学 短期大学部	栗田 智子	48
16	国際理解教育の導入授業としての「100人の村ワークショップ」の役割	金沢星稜大学	霞流 蛍 荒川 佳帆	50
17	テディベアプロジェクト支援 ～台湾の小学校への訪問記～	金沢星稜大学	新出 真奎 他7名	52
	http://www.jearn.jp/japan/iearn-report/index.html			ISSN 2434-0049

寄稿論文編

「アイアーンの国際協働学習」とは何か

-国際協働、プロジェクト学習、主体的・対話的で深い学び、
グローバル・コンピテンスの視点から-

栗田 智子（実践女子大学短期大学部）

世界の次世代を対象に、世界と学び合う「国際協働学習」を推進している NGO であるアイアーン（iEARN International Education and Resource Network）の国際協働学習とは何か。「国際協働」「プロジェクト学習」「主体的・対話的で深い学び」「グローバル・コンピテンス」の視点から考察した。アイアーンの国際協働学習は、プロジェクト学習の各フェーズで、海外の生徒たちと協働することができる「グローバル PBL」であり、世界の教員と生徒同士の信頼関係の構築が成功のカギとなる。その活動の目的は、地球および人々の健康と福祉に有益な貢献をするような「国際協働」を若者が行えるようにすることであり、グローバル社会を生きるすべての子どもたちに不可欠な資質・能力であるグローバル・コンピテンスを、小学校の段階から育成することが期待できると思われる。

アイアーン（iEARN） 国際協働 プロジェクト学習 グローバル・コンピテンス 主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）

1 はじめに

国内外でグローバル化が急速に進展する中、社会の変化に対応した資質・能力を育成することが求められている。世界的な動きとして、経済協力開発機構（OECD）は、「生徒の学習到達度調査」（PISA 2018）で「グローバル・コンピテンス」（GC）を提唱し、グローバル社会を生きるすべての子どもたちに不可欠な資質・能力としている。

PISA による Global Competence の定義とは、グローバル社会において求められる多面的な能力であり、その能力を持った個人は、地域の、地球規模の、そして文化間の問題を考察することができ、異なる視点や世界的視野を理解し、他者と敬意を持って交流し、持続可能で集合的な幸福につながる責任ある行動をとることができる（PISA 2018）。

日本では、「令和」の幕が開き、Society 5.0 における学校の「学び」の新時代を迎えている。AI 時代の次世代の教育として、主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の導入や新学習指導要領における教育の情報化の推進など、新たな学習環境がデザインされてい

る。新時代の授業では、学習者が学ぶことに興味や関心を持ち主体的に取り組むこと。子ども同士の協働、先生や地域の人との対話を通じて学習者の考えを広げ深めること。そして学習した知識を相互に関連づけて、より深く理解し、解決策を考えたり、考えを元に創造したりすることが求められている。そのアプローチとして協働学習やプロジェクト学習（Project Based Learning）が注目を集めている。

アイアーンは、世界の次世代を対象に、世界と学び合う「国際協働学習」を推進している NGO である。アイアーンのグローバルネットワークの日本センターである JEARN（ジェイアーン 特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構）を通して、日本では、2003 年よりアイアーンの国際協働学習が実施されてきている。

本論文では、国際協働、プロジェクト学習、主体的・対話的で深い学び、グローバル・コンピテンスの視点から考察し、アイアーンの国際協働学習とは何かを探求したい。

2 アイアーンの概要

アイアーン (iEARN : International Education and Resource Network) は、世界 140 の国と地域、3 万以上の学校・団体が参加する NGO である。

1988 年、アメリカとソ連の間で行われた NYS-MSTP (New York State- Moscow Schools Telecommunications Project) という協働学習の成功がきっかけとなり、アイアーンが設立された。冷戦時代の危機感の中で、創立者のピーター・コーペン (Peter Copen) は、アメリカとソ連の生徒たちが協働学習を行えば、相互理解と相互受容の精神をもち、地球市民として地球規模な問題を平和的に解決すると考えた。彼はニューヨーク州の 12 の学校とモスクワの 12 の学校をつなぎ、協働学習をスタートさせたのである。交流方法は、E メール、ルマフォン (ビデオ付き電話) そしてホームステイであった (福井 2009)。その後、アイアーンの活動は世界中に広がり、教育者 5 万人と生徒 200 万人が参加するネットワークに成長している。

アイアーン憲章の序章にあるように、「アイアーンの展望と目的は、地球および人々の健康と福祉に有益な貢献をするようなプロジェクトを若者が行えるようにすることである」。プロジェクトを立ち上げるのは、会員である教員であり、現場の教員が自ら立ち上げたプロジェクトに、他の会員の教員が参加する形でグローバルプロジェクト学習が始まる。こうした現場主導だからこそ、今必要な教育課題のプロジェクトが生まれくる。例えば、日本では、2005 年、阪神・淡路大震災の経験をいかした、防災のためのグローバルプロジェクト「防災世界子ども会議 NDYS : Natural Disaster Youth Summit」が誕生した。「コミュニケーションが命を救う！」をテーマに継続して「気候変動と私たちの住むまちの『防災・減災・復興』」という地球規模の課題に取り組み、その成果を未来へ発信している (納谷・岡本 2018)。これまでに 66 カ国・地域の生徒、教員が参加している。NDYS の他にも、日本からグローバルプロ

ジェクトが次々に生まれている。2020 東京の開催を前に、オリパラ教育をテーマとしたグローバルプロジェクト「The Olympics & Paralympics in Action Project (TOPA)」も 2019 年に誕生した。

3 国際協働の視点からの考察

アイアーン憲章 1 章 1 条には、12 の教育目標があり、「違った価値観や文化の背景を持った人たちと協働学習することで、学習者が異なる価値観を受容し、広い視野を持ち、課題を解決しよう」とする前向きで未来に対して肯定的な姿勢を持つことを目的としている。

ここでの「協働学習」とは、「国際協働」そのものを意味し、アイアーンの国際協働学習では、国際協働そのものに教育的価値を見出している。つまり、プロジェクトの課題達成のために、国際協働を用いるのではなく、国際協働を前提としたプロジェクトなのである。

「協働学習」とは、第一義的には学習活動に「協働」を用いる学習形態であり、坂本 (2008) は、次の 3 つの要素が不可欠であると述べている。各々の要素とアイアーンを照らし合わせて考察する。

「第一に、他の組織や地域、異なる文化に属していたり、多様で異質な能力を持った他者との出会いが前提となる。教室内に「他者」が存在する場合は教室の中での「協働学習」が可能になるが、多くの場合、教室外の組織や地域、文化に目を向けることになるだろう。」 (坂本 2008, p. 55)

アイアーンの協働学習は、異なる地域、文化に属した多様な他者との出会いが前提である。国際的なパートナー (International partners) と世界の同世代の聴衆 (Audience of global peers) の存在 (iEARN 2018) は、国際協働を可能にしている。

「第二に、学習者の高い自立性と対等なパートナーシップ、相互の信頼関係の構築である。」 (坂本 2008, p. 55)

アイアーンの場合、学習者が低年齢の場合もあるので、教員がファシリテーターとして、学習者の自律性を育て、対等なパートナーシップを構築できるように関わっていく必要があると思われる。教員用指導書(iEARN 2018)の中でも、「相互の信頼関係は、グローバルプロジェクトの成功の鍵である(p. 15)」と強調されている。生徒間の信頼関係と同様、教員にとって、パートナー校の教員との間の信頼関係も重要である。多様な教育システム、時差、多忙なスケジュールや学校の年度の区切りの違い、文化の違い、言葉の壁、そして直接の会話(inperson communications)の欠如などを乗り越えて、海外のパートナー校との協働作業を遂行する。年1回の世界大会であるiEARN conferenceとYouth summitは、会員である教員や生徒が一堂に会し、信頼関係を構築する貴重な機会となっている。

「第三に、学習目標や課題、価値観および成果の共有である。「協働学習」はプロジェクト型の学習であり、参加する学習者同士を結びつけるのは、共有された学習目標や課題の達成への強い意思に他ならない。それは他者同士の出会いから生まれた矛盾や葛藤を止揚し、新たな共同体と価値観を創造することにつながる。」

(坂本 2008, p. 55)

国際協働学習の一つの方法として、成瀬(2006)は、学習課題を設定して、教室内で各グループで協調学習を進めて、その成果をお互いに海外のパートナーと発表し合うことで効果的な学習を進めることができると提案している。

4 プロジェクト学習の視点からの考察

プロジェクト学習は、アクティブラーニングの一種であり、英語では、Project Based Learning (PBL) と呼ばれる。「プロジェクト」とは、ビジョンや使命感に基づき、ある目的を果たすための構想や計画などをさす。こうしたプロジェクトを学習に活かしたものがプロジェクト学習である(鈴木 2012)。

アイアーンのプロジェクトとはどのような

ものか。教員向け指導書(iEARN 2018)には次の4つが不可欠であると書かれている。

1. 教員や生徒によってデザインされ、始められる。
 2. 国際的なパートナーと人間関係によってネットワークができている。
 3. 世界の同世代の聴衆(Audience of global peers)との交流を通して行われる。
 4. 協働の成果物の創造によってすすめられる。
- このように、現場の先生や生徒がデザインし、世界のパートナー校と協働し、成果物を創造するプロジェクトが行われている。ある学校の教員の独自の発想によるプロジェクトを、アイアーンが運営するウェブサイト上のコラボレーション・センターに登録し、それを見た世界中の興味ある教員や生徒がオンライン上で学習参加するというシステムである。アイアーンの世界サイトのプロジェクトのページには、個々のプロジェクトの要約、説明、ファシリテーターの氏名、使用言語、生徒の年齢レベル、期間日付、可能なクラス活動、成果物、他者や地球へどのような貢献をするのか、カリキュラム分野(関連科目)が明記されている。会員は気に入ったプロジェクトに自由に参加することができる。

アイアーンのプロジェクトの課題は、健康、環境、食料安全保障、市民教育、平和教育、リテラシーと教育、社会的企業、女子のエンパワメントのような21世紀の実世界に関する解決すべき課題を扱っている。課題の多様性に加え、プロジェクト対象年齢が、K-12(5歳から18歳)のため、対象年齢のレベルに合わせた内容が様々で、プロジェクトの数は100を超える。

これらのプロジェクトを学習に活かしたものがアイアーンの世界プロジェクト学習(グローバルPBL)である。アイアーン(iEARN 2018)は、通常のPBLと次のように区別している。通常のPBLは、地域の専門家などにインタビューし、地域での課題解決のための成果物をゴールとするプロジェクト学習である。一方、アイアーンの世界PBLは、生徒たちは、

リサーチ、計画、プレゼンテーションを他国の生徒と国際的に協働して行うことができる。例えば、Finding Solutions to Hunger というグローバル PBL の場合、リサーチとして、他国の生徒にインタビューし食生活を調べ、食品流通をローカルとグローバルの両面から考察し、最終の成果物として、他国の生徒と協働で、飢餓に関するビデオを作成する。

プロジェクト学習とはどのようなプロセスで深い学びを創出するのか。プロジェクト学習の基本フェーズを鈴木(2012)は次のように説明している。まず「準備」のフェーズで、現実と向き合い自分の目で課題を発見する。次に「計画」のフェーズで、目的と目標を明確にして具体的なゴールを決める。「情報・解決策」のフェーズでは、情報を獲得、分析をして解決策を考え、「制作」のフェーズで、その解決策を他者に伝えるものを作り、「プレゼンテーション」し、そして、全体を「再構築」し、振り返りによって自分の変容や身についた力を「成長確認」という段階を踏む。

プロジェクトを「意志ある学び」(鈴木 2012)、つまりプロジェクト学習に繋げるためには、プロジェクトの準備段階で現実に向き合い、課題を子どもたちに発見させることや、何のためにそのプロジェクトを行うのかの目的を子どもたちに意識させ、子どもたち自らの意思で情報を収集し解決策を考えていくようにファシリテートすることが大切である。ファシリテーター(教員)の上手な問いかけによって、子どもたちは自分の頭で考え、自分たちで学び、成長していく。鈴木(2012)が指摘するように、プロジェクト学習は、命令や指示によってするものではなく、学習者が自分のすべきことを考え、自らの確に動けることを狙いとしている。個々のプロジェクトは、ファシリテーターによって、各フェーズにおける成果もクオリティも異なる可能性がある。ファシリテーターとしてのスキルが重要である。

アイアーンのグローバル PBL では、「情報・解決策」、「制作」、「プレゼンテーション」の各フェーズで、同じ課題解決をめざす他国の

生徒と出会い、共に学ぶ。アイアーンの国際協働学習は、海外の多様な他者との対話・協働を通し、グローバルとローカルの両面で課題を考察し、成果物を作成する。

5 主体的・対話的で深い学びの視点からの考察

日本では、文部科学省の学習指導要領の改定をきっかけに、主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニング)の視点で教育の見直しが計られており、そのアプローチとして協働学習やプロジェクト学習(Project Based Learning)が注目を集めている。アイアーンの国際協働学習は、プロジェクト学習であり、協働学習である。アイアーンの国際協働学習を、日本の学校の授業のメインコースとして導入するには、ファシリテートの方法や評価の方法の開発が必要である。協働学習は、多様な考え方を生かす学習であり、「評価とは何か」に関する考え方も大幅に変化する可能性が高い(白水2018)。

日本では、大学の支援のもと、アイアーンのプロジェクトを小・中学生に体験してもらう機会が増えている。また、豊かな外国語教育の視点から、英語を使って世界とつながることができるアイアーンの国際協働学習に興味を持つ教員も増えてきている。日本の学校現場に合わせた効果的な国際協働学習を研究することは、今後の課題の一つである。

6. グローバル・コンピテンスの視点からの考察

経済協力開発機構(OECD)は、「生徒の学習到達度調査」(PISA 2018)で「グローバル・コンピテンス」(GC)を「地域の問題、グローバルな問題、および文化間の問題を考察する能力」、「他者の世界観や視点を理解する能力」、「異なる文化背景を持つ他者と、オープンで適切かつ効果的な交流をする能力」、そして「集合的幸福と持続可能な開発のために行動できる能力」と定義づけている(PISA 2018)。それはグローバル社会を生きるすべての子どもたちに不可欠な資質・能力としている。すなわち、

一部の特別な生徒が身につける限定的な能力概念ではなく、国内で、地域で21世紀を生きていく多くの生徒達、もしくは彼らを育てる教師達にとっても普遍的な能力として捉えなおさなければならないことを意味する（福島大学2018）。

高校生以上を対象としたグローバル・コンピテンスの育成は、アイアーンの他にも行なっている団体がある。OECD 日本イノベーション教育ネットワーク (Innovative Schools Network supported by OECD: ISN) は、PISA (学習到達度調査) や TALIS (国際教員指導環境調査) で知られる OECD (経済協力開発機構) や文部科学省の協力のもとに生まれた産学コンソーシアムで、高校生を対象に国際協働型のプロジェクト学習を推進し、グローバル・コンピテンスを始めとする 21 世紀型スキルを生徒が身につけることをめざしている（福島大学2019）。

多面的な能力を含むグローバル・コンピテンスの育成には、子ども達が21世紀の重要な課題についてリサーチし、多様な文化、価値観を持つ他国の生徒達と対話・協働し、地球市民として問題解決に取り組む「国際協働」の経験は効果的であると思われる。

アイアーンには、小・中学生向けのグローバルプロジェクトが多数あり、低学年からグローバル・コンピテンス育成に取り組むことができる。例えば、ホリデーカード交換 (Holiday Card Exchange) プロジェクトは、世界中からたくさん的小・中学生が参加している。自国の祭日行事の文化を伝える手作りのホリデーカードやビデオレターを海外の学校と送り合い、文化の多様性を学ぶことができる。また、テディベア (Teddy Bear) プロジェクトは、ぬいぐるみを留学生に見立て、パートナー校に送り合い、そのぬいぐるみが体験した他国の日常の暮らしを互いに伝え合う。こうしたプロジェクトを通し、「異文化を受け入れ、同時に自文化とは何かを問い、受け入れること、理解すること、主張すること、行動することをプロジェクトの中で身につけながら、自然に地球的な視野で世界

事情を考え実践する力を持った成人へと成長していく（高木 2006）」のである。

ファシリテーターである教員もまた、世界中の教員とプロジェクトを通して国際協働を体験する。教員のグローバル・コンピテンス育成も不可欠である。

7 結論

アイアーンの国際協働学習を「国際協働」「プロジェクト学習」「主体的・対話的で深い学び」「グローバル・コンピテンス」の視点から考察してきた。

アイアーンには、5歳から18歳までの様々な年齢とカリキュラム分野に対応したプロジェクトがあり、国際協働学習は、そのプロジェクトを活かすプロジェクト学習である。それは、プロジェクト学習の各フェーズで、海外の生徒たちと協働することができる「グローバル PBL」であり、世界の教員と生徒同士の信頼関係の構築が成功のカギとなる。その活動の目的は、地球および人々の健康と福祉に有益な貢献をするような「国際協働」を若者が行えるようにすることであり、グローバル社会を生きるすべての子どもたちに不可欠な資質・能力であるグローバル・コンピテンスを、小学校の段階から育成することが期待できると思われる。

一方課題もある。国際協働学習は、日本ではまだ新しい教育アプローチであり、学校現場への導入には新しい仕組みが必要である。そこで、地域連携やグローバル教育の機会が求められている大学を拠点として、大学生がファシリテーターとなり、小・中学生を対象にアイアーンプロジェクトを行う JEARN Youth Project が 2017 年にスタートしている。さらに小中高大・民の連携により、ファシリテーターとしてのスキルや、学習指導要領とアイアーンプロジェクトを構成させた授業の計画などの研究開発に取り組む必要があると思われる。アイアーンの国際協働学習を通じて、Society 5.0 という新たな時代において、日本の子どもたちが、豊かに生き、未来を力強く切り拓く力をつけてくれることを願っている。

参考文献

<https://www.oecd.org/pisa/pisa-2018-global-competence.htm>

坂本旬 (2008) 『「協働学習」とは何か』
生涯学習とキャリアデザイン p.49-57
法政大学

白水始 (2018) 『協働学習- 多様な考え方を
生かす学習のあり方- 』LD 研究、Vol.27. No.1,
p.58-64

鈴木敏江 (2012) 『問題解決力と論理的思考力
が身につく プロジェクト学習の基本と手法』
教育出版株式会社

高木洋子 (2006) 『グローバルな協働学習の時
代-NPO法人と進める国際教育の具体案- 』
学習情報研究 p.25-28

納谷淑恵・岡本和子 (2018) 『防災世界子ども
会議NDYS 2017-2018』 国際協働学習iEARN レ
ポート p. 9-10. 特定非営利活動法人グローバ
ル推進機構 (JEARN)

成瀬喜則 (2006) 『ITCを活用した国際交流学
習の意義と課題』 学習情報研究 p.13-16

福井良子 (2009) 『国際協働学習の普及におけ
るNPOの課題と役割』神戸大学大学院 人間発
達環境研究科修士論文

福島大学 (2018) 『平成29年度 新時代の教育
のための国際協働プログラム 成果報告書』 国
立大学法人 福島大学

文部科学省国立教育政策研究所・JICA地球ひ
ろば共同プロジェクト (2014) . 『グローバ
ル化時代の国際教育のあり方国際比較調査』

iEARN (2018) *Teacher's Guide to Online
Collaboration & Global Projects*

PISA(2018). *Global Competence*. Retrieved
from

2. 小学校におけるテディベアプロジェクトの活用

小学生が意欲的に世界事情に関わるきっかけづくり

高尾 好(金沢星稜大学)

金沢星稜大学では清水ゼミで金沢市内の小学校でのテディベアプロジェクトをサポートしている。大学3年生を中心に金沢市の各校で「世界がもし100人の村だったら」という学習教材をはじめ、今年は台湾の小学校との交流のサポート、台湾の小学校の視察なども行なった。国際化が進み、情報活用能力や英語の活用能力がますます求められる時代に小学生の子どもたちが無理なく世界とつながる楽しさや喜びを感じられる学習の1つとして筆者が大学3年次に大阪研修のJEARN(グローバルプロジェクト推進機構)総会で出会ったテディベアプロジェクトを活用した事例を紹介したい。

テディベアプロジェクト 国際交流 英語の活用 世界への興味

1 はじめに

石川県教小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総合的な学習の時間編には総合的な学習の時間に扱う内容の1つの例として国際理解について挙げている。そして、『国際理解に関する学習を行う際には、探究的な学習に取り組むことを通して、諸外国の生活や文化などを体験したり調査したりするなどの学習活動が行われるようにすること』と述べている。また、必要があれば、学校外の個人や団体・企業との連携も考えるとよいと記しており、金沢市内のいくつかの小学校では高学年の総合的な学習でNPOの団体であるiEARN(アイアーン、International Education and Resource Network)の提案するテディベアプロジェクトに参加し海外の同じ年頃の小学生たちと交流する活動を行っている。

テディベアプロジェクトでは留学生となるぬいぐるみを決め、名前や性格決めたのち留学先の学校とぬいぐるみを交換し合う。相手校にしばらく滞在させ、現地での生活を日記形式で伝え合うことで、現地の文化や日常をプロジェクトに参加している自分たちが体験しているかのような感覚に近いものが得られる。滞在期間を経てぬいぐるみたちは元の学校に戻される。このプロジェクトでは、ぬいぐるみが実際には海外に留学できない小学生たち自身の代わりとなって海を渡り、見知らぬ地の小学校に行くことで、出発前にぬいぐるみに愛着をもった分ぬいぐるみ目線で現地の生活により

興味を持って活動に参加できる。これは、ただ世界を学ぶために世界に存在する「とある国」について学ぶよりも興味・関心や子どもたちの意欲的に学ぶ態度が促進されるということで優れていると考える。更には、テディベアという可視化できる「モノ」を送り合うことで留学生としての「存在感」があることや「愛着や感情の向くターゲット」としての役割は大きいと考えられる。

筆者も大学3年次にはモロッコとのテディベアプロジェクトを行い、実際にモロッコの高校生たちとテレビ会議をしたり、スマートフォンを用いてメッセージを送り合ったり、相手国からぬいぐるみが届いてからはゼミナールの学生たちの中で順番を決めて家に滞在させたりと、ぬいぐるみに日本の文化を体験させるべく様々な場所へ連れ出しては写真を沢山撮ってぬいぐるみの体験日記のようにして伝えあった。写真を撮ったり、日記を書いたりするとき、常にモロッコの学生への相手意識がそこには存在し、どうすれば伝わるか、どうにか相手に伝えたい、という感情がゼミナールの学生たちを突き動かしていた。

今年度もこのテディベアプロジェクトを小学校教育で実践し、異なる文化を持つ国の子どもたち同士がつながる機会を生み出す過程とその結果について記す。

2 目的

本研究においては、9つの国際交流プロジェ

クトを分類、小学校で実施可能な効果的な国際交流プロジェクトの持つ要素を明らかにする。

3 研究の方法

1) JEARN、そしてその母体である iEARN が提案する国際交流プロジェクトのうち、代表的な 9 のプロジェクトを抽出して分析し分類する。

2) 国際交流プロジェクトを実践している金沢市内の小学校での活動を記録し分析する。

3) 分析結果をまとめ、更なる小学校教育現場での活用を目指し、国際交流プロジェクトが国際理解教育に及ぼす効果を考察する。

4 研究の結果

1) プロジェクトの分析を通して

本研究ではネットワークを通じて 140 カ国以上にある 3 万を超える学校や団体と国際交流プロジェクトに参加できる JEARN・iEARN のプロジェクトから以下の 9 のプロジェクトを抽出し分析した。

図表 1 プロジェクト名一覧

① アンネ・フランクパネル展	② まちんと
③ My Name	④ GOMI on EARTH
⑤ 大正琴	⑥ Origami
⑦ 青少年ペンフレンドクラブ	⑧ 防災世界こども会議
⑨ テディベアプロジェクト	

上記のプロジェクトはそれぞれ活動の内容が異なるため、筆者独自の 7 つの観点からの分析を試みた。7 つの観点とは

- A) 対象年齢
- B) 参加形態
- C) ペア活動の可否
- D) 交流活動で主に扱われる言語
- E) 交流相手の認識の有無
- F) 成果物の有無
- G) 活動で扱うテーマ

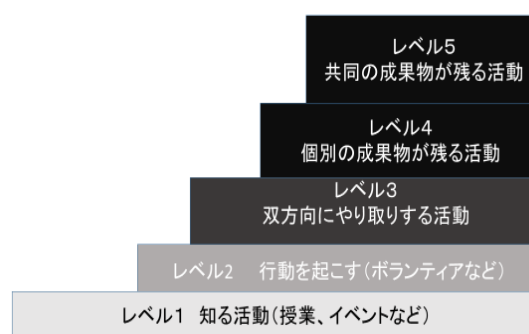
である。

更に、これらの分類項目を以下のような分類方法で評価した。

- A) 対象年齢…小学校、中学校、高等学校以上のどの段階を対象としているか 3 つに分類した。
- B) 参加形態…クラス、学年、その他の 3 つに分類した。
- C) ペア活動の可否…○、△、×の 3 つに分類した。○…有、△…可能性あり、×…無
- D) 活動での英語の活用機会…○、△、×の 3 つに分類した。○…有、△…可能性あり、×…無
- E) 交流相手の認識の有無…○、△、×の 3 つに分類した。○…有、△…可能だが少ない、×…無
- F) 成果物の有無…○、△、×の 3 つに分類した。○…有、△…可能だが少ない、×…無
- G) 活動で扱うテーマ…テーマ名を記載した。

プロジェクトの分析を行っていくうち、10 のプロジェクトは 5 つの活動レベルに分けられるのではないかと考えた。

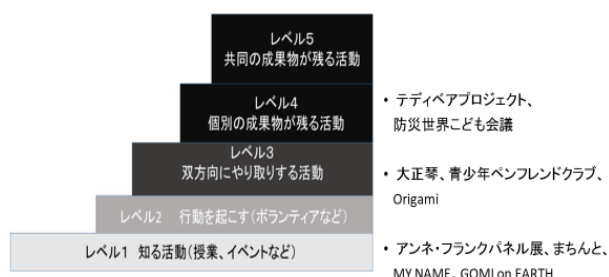
図表 2 プロジェクトのレベル分け



まず、レベル 1 は世界について知る活動である。これは世界では今どのような問題が起きているのか、またその原因は何であるのか、現状を知ることによって知識をつける活動を指す。次にレベル 2 は、世界について知った上で行動を起こす活動である。寄付を募ったり、一般的なボランティア活動を行ったりするものを指す。これらは活動に取り組む側からの一方的なアプロ

一歩であることが多い。レベル3では世界について知り、相手から自分、また自分から相手への双方からのやりとりがメインである活動である。そしてレベル4に、個別の成果物が残る活動がある。学びを進めていくなかで、また学んだ後に交流した証として物が残る段階である。最後にレベル5としてレベル4の物が残るという条件に加えて、交流相手と交流するで、相手と交流相談しあったり、話し合ったりした結果、共同の成果物が残るという活動を指す。この5つに分けられるのではないかと筆者は考える。5段階といったが、レベル1、レベル2、レベル3と順を追って取り組んでいくことが無難だと考えるが、年齢や学力、能力に対応する段階のものに直接取り組んでも問題は無いと考える。この図では上にあるものほど活動レベルが高く、相手との交流密度も高い。コミュニケーション能力にも高い技能が必要とされる。レベル分けの図に先ほどの10のプロジェクトをあてはめたものが次の図表3である。

図表3 プロジェクト名入りレベル分け図



すると、レベル4にテディベアプロジェクトと防災世界子ども会議、最上段のレベル5にはアートマイルプロジェクトがあがった。実際に市内の小学校で6年生の総合的な学習の時間の取り組みとしてテディベアプロジェクトを行っているところもあり、筆者は金沢市立額小学校6年2組の約3か月の活動記録を取った。

2) 小学校での実践記録

6年2組担任のY教諭は昨年も6年生を受け持ち、テディベアプロジェクトの経験もある。今年のテディベアプロジェクトでは6年2組からは「ジン」と「ももこ」という2人の留学生

を交流相手校である台湾の五常小学校に送りだすとのことだった。記録の1日目をここに記載する。

1 日目の記録 (11月6日火曜1限目)

この時間は台湾からの留学生が日本に届いたらどうするかについて話し合った。Y教諭がクラスの子どもたちに、台湾から留学生を送り出したとの連絡があり写真も送られてきたことを伝えると、子どもたちから「おお!」という声や「え、どんな写真、どんな写真」と反応が返ってきた。子どもたちはついに相手国から留学生がやってくる状況を目前に控え、わくわくしているようだった。留学生が着いたらまず何をするかという話し合いになり、テディベア留学生を迎える歓迎会をするのはどうかという案が出た。一部の子どもからは「ぬいぐるみなのに歓迎会をするの?」と不思議がる声も出たが、Y教諭の「みなさんがもし外国に着いて『はい、学校です』って連れて来られて『はい、じゃあそこに座っていてね』って言われたら、どうです?」という投げかけを受けて「歓迎会は必要だ」との声が強まっていった。Y教諭の発問は、児童たちに「送られてくるテディベアを児童たちと等身大の人間の留学生と見なす」想像力の手助けとなったように感じた。Y教諭は児童たちがまだ完全にテディベアを留学生とみなせていないようだ、と感じ取ったことがうかがえた。初めてテディベアプロジェクトに参加し、テディベアの扱いが分かっていない児童たちにはこのような教師自身が子どもたちに投げかけも必要かもしれないと筆者も気づかされた。この発問により子どもたちの中でテディベアに対しての見方が少し変わったように思えた。この後も何度か6年2組を訪れたが、クラスを訪れるたびに台湾からの留学生たちへの愛着と、台湾という国に対しての親密度が増していると感じた。交流相手国の台湾について学ぶなかで、台湾の発展には金沢の偉人、八田與一が関わっていたことや、日本とは異なる台湾の生活・文化などを一つ一つ理解していった。ただ単に他国について学んだり、自国の文化を見直す機会を設けられた場合よりも、相手

国から実際に「やってきた」人物(に見立てたぬいぐるみ)がいることで相手意識が芽生え、なぜ他国について学ぶ必要があるのか、その地の文化を知ることが大切なのか頭だけでなく心でもおのずと感じられているようであった。

同じく1組も3組も台湾とのテディベアプロジェクトを行っており、3クラスとも順調にプロジェクトを進めていった。今回のプロジェクトの進行に際して、テディベア以外にも台湾の伝統的な組みひものお守りが一人1つプレゼントとして届くなど「モノ」が海外から届くという日常生活ではなかなか体験できないことが体験できたことは児童たちにとって刺激的な内容だったと記録していて分かった。更に、学年全体の活動として、各クラスごとに大型モニターを用いて台湾の相手クラスの児童たちとテレビ会議をしたり、台湾と日本の先生同士で連絡を取り合う際には日常生活で使っているアプリケーション「LINE」の活用があったりと様々な工夫が見られた。



活動内容をより濃厚なものにする方法はいくつもあるが、これらもそのうちの1つだと筆者は考える。1度目のテレビ会議を終えた児童たちからは「テレビ会議面白かった」「もっと伝えたい」「もうちょっと英語話せるようになりたい」などの声も聞くことができた。このことから、小学校で国際交流プロジェクトを活用することで児童たちの英語学習への意欲や、海外の同年代の児童たちと交流することを楽しい、面白いと感じている様子がうかがえた。

5 まとめ

国際交流プロジェクトの持つ要素として、

- ① 交流相手の認識ができること
- ② 互いに交流し合った証として成果物が残ること
- ③ 交流相手と協力したり相談したりして1つの成果物が残ること

この3つが重要なのではないかと筆者は考える。交流相手の顔が明白になるとはっきりとした相手意識が生まれ、子どもたちの活動にも積極性が増した。今回の分析で、小学校でより効果的な国際交流プロジェクトに参加することは国際理解教育において子どもたち自身が積極的に世界の人々に関わる機会を生み出す効果があるということが分かった。

国際理解にまつわる教育は様々な教育と関わりあっており、ありとあらゆる科目と絡めて取り組めることが強みであることも生かし、筆者が教壇に立った際には是非国際理解教育の中で子どもたちとともに国際交流プロジェクトへの参加を試みたい。

*本論文は2018年3月に石川県教育工学会で発表したものを一部改訂して再掲したものである。

3. テディベアプロジェクトと大学の支援

清水 和久（金沢星稜大学）

小学校では2020年から5, 6年で外国語が始まり、全学年でプログラミング教育も始まるため総合の時間が削られつつある。長時間かかる総合的な学習は敬遠される傾向にある。そこで、ある程度自校の都合でフレキシブルにやりくりできる国際交流プロジェクトとしてテディベアプロジェクトを小学校の先生とともに実施した。交流ツールとしてLINEを使うことで教員同士頻繁な交流がなされ、大学生がサポートすることで、小学生は交流国をより身近に意識することができた。

国際協働学習 テディベアプロジェクト 大学の支援

1 はじめに

小学校の多忙化にともない、外国の交流相手校と時間をかけながら行う国際交流プロジェクトは実施が難しくなってきた。しかし、英語の時数の増加で、英語を使う必要感を感じさせる場も必要となってくる。このような状況下で、膨大な労力をかけず、且つ自分のクラスの裁量である程度進めることができるテディベアプロジェクトを小学校現場の先生と一緒に進めることとする。

2 目的

「大学として小学校でテディベアプロジェクトを進める上でできる支援は何か」を、一緒にプロジェクトを進行する中で見つけ、小学校現場と大学側が共にウィンウィンになる仕組みを明らかにする。

3 方法

協働研究会の本報告書が広く認知されるように、ISSNの番号を取得し、書式を共通のものとする。

(1) 国際協働研究会の設立と日程

(2) 交流に必要な仕組み

(3) 交流ツールの効

4 研究の内容

(1) 交流のツール

国際協働研究会の設立と日程

「テディベアプロジェクト」は、ぬいぐるみを日本の学校と外国の交流校と交換し、ぬいぐるみが滞在する様子を互いに伝えあい、自文化の表出、異文化理解をはかるものである。本年度は6クラスの参加があった。

表1 一般的なテディベアプロジェクトの展開例

月	活動のねらい	活動内容
9月	○ぬいぐるみに思いを込める事 ・自分たちの代表としての性格付け ・日本人の特徴を考える	・ぬいぐるみの性格付けのためにパスポートの作成（・名前 ・特技 ・家族構成等） ・自分たちの自己紹介もカードとして一緒に送る
10月	○ぬいぐるみ取得後 ぬいぐるみを通して日本の文化の紹介を考える ○ぬいぐるみ取得前 自分たちのことについての英語での自己紹介の作成（カードに書いてデジカメで撮る） *導入授業100人村のワークショップの実施	・相手のぬいぐるみ目を通して、学校生活の紹介をする ・家に持ってかえって、デジカメで撮影し、朝のスピーチで紹介する（国語） ・英語の時間を利用して自分たちの自己紹介やクラスの紹介をする ・100人村のワークショップで世界のことをもっと知りたいと感じる
11月	○互いに知りたいことを伝えることで異文化理解を図る ○送ったぬいぐるみが外国でどのように暮らしているかをしり異文化理解につなげる。 ○送られてきたぬいぐるみが日本でどのような生活をしているか交流校に伝え、自文化を発信する。	・skype 会議をして英語での質問や、出し物（歌、おどり）などをみせあう ・時差などでskype 会議ができない場合でも英語を使ったビデオ映像の作成も可能。また向こうの先生と日本の子供たちがSkype 会議をすることも可能 ・ぬいぐるみの活動の様子をフォーラムで紹介していく
12月	○相手の先生と連絡を取り合って、さらに詳しい情報	フォーラム上で活動の様子を静止画で伝え、質問事項を集約して

	報を交換し、異文化交流を続ける	答えてもらったり、答えたりする
1月	日本での活動を振り返り、自国文化についての理解を深める	ぬいぐるみが体験したことを、動画や、日記に表し、思い出として、一緒に送る
2月	外国から戻って来たぬいぐるみの記録から、異文化について理解する。	英語で書かれたものや、写真などから外国での生活を想像する。

表2 プロジェクト参加校と交流相手校一覧

参加クラス6	台湾 3校の校名
額小6年(3)	台湾 五常国民小学校
四十万6年(2)	台湾 精忠国民小学校
大野町小5年(1)	台湾 新甲国民小学校

表3 国際協働学習研究会の実施内容

回	研究会の内容
1	6月11日：国際協働学習研究会の趣旨説明 JEARNのテディベアプロジェクトの説明
2	7月2日：JEARNへのオンライン申し込み プロジェクトのパートナー校のマッチング
3	8月28日：フォーラムの書き込み練習 教師による自校の紹介書き込み
4	10月1日 マッチングに基づいて各校個別に交流の開始 ぬいぐるみの準備、児童による性格付け、学校紹介の準備
5	11月21日：各校による交流のスタート時からの経過報告 TV会議実施、課題点討議（各校LINEのビデオ通話で）
6	12月3日：国際交流の経過報告 100人村ワークショップ打ち合わせ（予定より遅れる）
	1月 星稜大学生の台湾の小学校訪問
7	1月14日：国際交流の経過報告、話し合い 学生の台湾の訪問報告会について打ち合わせ
8	2月研究のまとめ

教師自身が日々の業務の中で、外国の先生と英語でコミュニケーションをとることは大変ではあるが、外国の交流相手とは同じ教育者としての共通点があり、児童のことを第一に考えるというスタンスは同じなので、両方の国で、未来を担う子供たちを育てるという意識で取り組んだ。交流がうまく続かない、児童のモチベーションの維持が難しいなどの問題点を研究会で共有しながら進めた。特に今年度は初めてのプロジェクトであり、研究会では、ぬいぐるみの性格付けなど、

お互いの学校の工夫点を紹介しながら実施。

9月からこの活動に沿って月に1度研究会を開き、互いの工夫点や、困っていることを共有し、初めての国際交流をする教師が困らないように支援をおこなった。同時に学生も参加するので、教師サイドからプロジェクトの進行具合を確認することができる。

(2) 交流に必要な仕組み

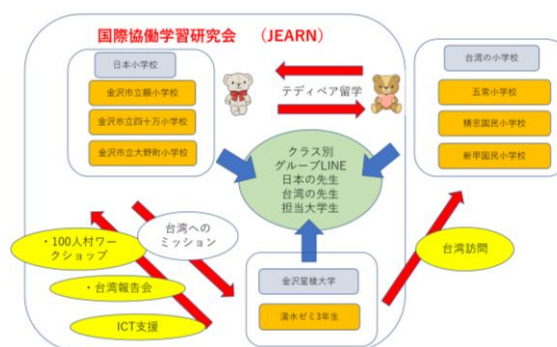


図1 日本、台湾、大学の3者の関係図

(3) 交流のツールの効果

iEARNでは交流ツールとして、クローズドなフォーラムを設けている。参加校はこのフォーラムで交流校と共通スレッドをたて、情報を交換することになる。しかし、日本の学校の教育用ネットからはフォーラム（掲示板機能があるもの）へのアクセスが難しいところもあり、小学生が直接書き込むことは難しい、また教員の多忙化によりパソコンを開いている時間の確保も難しい状況である。そこで今回はスマホのLINEのグループ機能を活用した。12月から3月の間に、前年度は4、5回しかやりとりがなかったのに今年度は44回のやり取りをするなど交流の頻度がかなり上がった。LINEのグループに交流当事者の他、筆者や担当の学生も入ることにした。また言語の問題としては中国語の翻訳アプリも参加させることで、活性化につながった。

5 まとめ

大学生が交流のつなぎと役として入ること、代理で交流校へ訪問すること、先生と研究会を持ち、交流意図を知ること、学校現場と教員を目指す大学生とどちらもメリットを感じることができた。

4. 2018 年 iEARN Virginia 大会参加報告

—iEARN 国際会議の内容と意義—

清水 和久（金沢星稜大学）

本論文では今回のアメリカの会議において、筆者が参加した分科会を中心に報告するとともに、その他の iEARN のプロジェクトの内容もあわせて比較した。結果、共通の教材があり、その教材をもとに交流が促進できるものがあること、WEB 会議などで話し合いができる機会があること、そして成果物が可視化されるものがプロジェクトとして活性化していることがわかった。

国際協働学習 国際会議 iEARN JEARN

1 はじめに

2018 年 7 月 8 日から 13 日まで、iEARN 第 30 周年記念国際会議及びユース会議が U. S. A のバージニア州のウインチェスター市の John Handley high school を会場にして開催された。筆者は、今回を入れて 8 回この国際会議に参加している。本論文では筆者の参加した分科会を中心に内容を紹介し、各分科会で紹介されたプロジェクトの比較分析を行う。



写真 1 会場校 John Handley high school

2 iEARN について

アメリカの Peter Copen 氏が、アメリカとソ連が冷戦下で、相互の国民が不信感を抱いている事実を嘆き、互いが分かり合えるために若者同士をつなごうと、Copen Family Foundation を 1988 年に設立し、モスクワとニューヨーク州の 12 校ずつの学校をつないだプロジェクトをスタートさせたのが始まりである。両者の学校間では、社会的政治的な問題について討論が

なされたり、互いの国の著名な作家の本を読み合ったりなど異文化理解が進んだ。



写真 2 左が創始者 Peter Copen 氏

今年の iEARN の大会は 1988 年の設立から数えると 30 年目であり 30 周年記念大会という呼称がつけられた。初日の全体会で、この iEARN の創設者 Peter Copen が登壇し、ユースから質問を受けて答えるという形で当時の様子を語っていた。

財団の設立当時はお金もなく、人を雇うこともままならなかったようである。しかし 1994 年に、iEARN の第 1 回の年次国際会議がアルゼンチンで開かれ、それ以来、年次大会自体は、昨年のもロッコ大会で第 23 回を数えるまでになった。iEARN は、草の根レベルで教育者同士、またそのクラスの児童、生徒を結び付け、英語をツールと使うことで、お互いの国の文化を理解するとともに、協働で学習を進めることで、国境を越えた協働作業の素晴らしさを体験できる機会となっている。

3 iEARN アメリカ大会の概要

2018 年の年次国際会議は、中高生が参加するユースサミットとともにアメリカのウインチェスター市で、7月8日から7月13日まで開催された。今年で組織の設立から30年目になり、30周年記念大会として開催された。50カ国から、約400名の教育者と中高生が参加。5日間（4日間の分科会+1日間の観光）開催期間で、全体会での Key note speech が9本、分科会（ワークショップも含む）が85本、ユースサミットで50のセッションが実施された。分科会のプレゼンターは、日ごろオンラインでiEARN プロジェクトを行っている教育者が、アメリカの会議に参加し、合同で発表する場合が多かった。分科会も視聴者参加型で、聞きに来た人と対話しながらの会が進んだ。本報告では、筆者が参加した会で発表された分科会から8本選んでiEARN で公開されているwebも参考にして紹介する。番号がついているものが筆者の参加した分科会などである

表1 大会スケジュール

7月	午前1	午前2	午後1	午後2	午後3
9日	開会式	全大会	分科会 5本	分科会 8本①	ポスター
10日	全大会 2本	分科会 6本	分科会 8本②	分科会 8本③	分科会8 本④
11日	観光ツアー				
12日	全体会	分科会 7本⑤	分科会 7本⑥	分科会 7本⑦	Culture night
13日	分科会 7本⑧	分科会 7本⑨	分科会 7本⑩	全体会	閉会式

筆者の参加した分科会のテーマ

- ① MACHINTO: HIROSHIMA FOR PEACE
- ② TOUCHABLE EARTH
- ③ CREATING AND SUSTAINING GLOBAL PARTNERSHIPS: HOW TO MAKE FRIEND AND INFULNCE SDGS
- ④ SPREDING THE ROOTS OF INDIAN ART: A HANDS-ON ART WORKSHOP ON AN INDEIAN FOLK ART FORM

- ⑤ HANDS ON PEACE: AN INTERCULTURAL EXPERIENCE, BRAZIL-JAPAN
- ⑥ PROFESSIONAL LEARNING THROUGH ACTION RESEARCH
- ⑦ MY WORLD 360: EMPOWERING THE NEXT GENERATION OF SDG JOURNALISTS
- ⑧ iEARN GIRL RISING PROJECT
- ⑨ LET'S THINK ABOUT EDUCATION FROM CLASSROOM STYLE (YOUTH SUMMIT)
- ⑩ FOLK AND CULTURE PROJECT

4. 筆者の参加した分科会（①から⑩）の概要

4-1 MACHINTO: HIROSHIMA FOR PEACE

発表者：Yoko Takagi (日本)、Arlene (プエルトリコ)、Catherine (アルゼンチン)、Sandra (パラグアイ) 日本人の高木洋子氏が始めたプロジェクトで、広島の被爆の様子を描いた絵本「まちんと」（松谷みよこ作）の絵本を共通の教材として、戦争について感じたことを絵本やビデオにし、共有するプロジェクトである。

まず、高木氏が広島や長崎でたった1発の原爆が多くの人を命を奪い、生存者も放射能によって苦しんだことを話したあと、現在世界が保有する核兵器で地球が6回全滅することを伝えた。そのあとで「まちんと」の絵本を朗読し、現在でも平和を願う「まちんとバード」がシリアや紛争が起こっている地域で平和を訴える必要があることを訴えた。この絵本は英語版とスペイン語版があり、プロジェクト参加者には無料で配布され、各国で学習したのち、iEARN のフォーラムで交流することになっている。

フォーラムの教材には、広島や長崎の被爆時と現在の様子を比較できる動画が掲載されており、参加者は原爆の恐ろしさを知ることができる。また、参加した児童生徒が作成した絵本などもPDFで見ることができる。当時の悲惨さを学習するだけでなく現在紛争が起こっている地域の学習や、過去の自国の戦争についても学習を深めることができるプロジェクトである。

戦争経験者でもある高木氏自身が教材となってプロジェクト参加校とweb会議を行い、話題も提供している。2018年度は、アルゼンチン、スペイン、メキシコ、プエルトリコの4か国で

このプロジェクトを行っており、web 会議の記録もフォーラムから見ることができる。

4-2 TOUCHABLE EARTH

発表者：Tudor Clee(ニュージーランド) 他1名
発表者が世界中を旅行して、こども目線で撮りためた動画を見られる。訪問先の子どもが、自分たちの自己紹介や、家族、学校、遊びなども含めて自分自身を紹介するスタイルの動画となっている。これはSDGsの4番目の目標(質の高い教育の保障)の7番「2030年までに持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル・・・(中略)・・・グローバルシチズンシップ・・・(中略)・・・必要な知識と及び技能を習得できるようにする」につながる。現在はネパール、インド、中国、ルーマニア、イラク、南アフリカなど6か国の動画があり、iPadなどのアプリとして発売されている。2014年にBest App for Children and Toddlers にノミネートされるほど、子どもにとっては外国のことを学びやすいアプリになっている。このアプリは分科会で、紹介があった。しかし、現在日本からはこのアプリを入手はできない設定になっている。

4-3 CREATING AND SUSTAINING GLOBAL PARTNERSHIPS: HOW TO MAKE FRIEND AND INFULENCE SDGS

発表者：Fay Stump(USA) (他2人)

聴衆参加型のワークショップ、SDGsの目標を達成するためには、教師個人の力だけでは不十分であり、国を超えた協働学習の実行が有益であることを、参加者に考えてもらおうと共に、その具体的な成功例としてプロジェクト実践者の実践例を紹介した。

4-4 SPREDING THE ROOTS OF INDIAN ART: A HANDS-ON ART WORKSHOP ON AN INDEIAN FOLK ART FORM

発表者：Kalyani Voleti(インド)

インドのMaharashtra州に住む先住民族のWarli tribalの伝統的なデザインについて学び体験するワークショップ。デザインは非常に基本的な図形(三角形、四角形、円)から構成されており、人間の体は先端がつながった三角形で表され、体を単純化しアニメ化することで、

多彩な表現が可能になっている。参加者は基本的な図形をもとにオリジナルのデザインを描画した。

4-5 HANDS ON PEACE: AN INTERCULTURAL EXPERIENCE, BRAZIL-JAPAN

発表者：Alimerinda(ブラジル) 滝沢麻由美(日本)

このプロジェクトは9月から11月までの3か月間で行われ、以下の手順で実行される。

9月 平和を作り出した「ピースメーカ」について調査

教師も生徒もどのように平和に貢献できるか考える

10月 平和のパネルの作成

このデザインの中に自分たちの手の形を書き入れ、平和の象徴であるハトなどを描画する。

11月 パネルを参加国に郵送し、自国に送られてきたものを平和の日を決めて展示する。

このプロジェクトは3か月間と現実的であり取り組みやすい。また作品を送りあうので協働学習を意識しやすい。

発表者の滝沢氏は日本の小中学校の英語のクラブの支援者として参加、東京オリンピックが2020年に開催されることから、2016年の開催地であるブラジルと平和の祭典であるオリンピックでつながることでこのプロジェクトを実施したことを発表した。滝沢氏は、今後東京オリンピックを契機に新しいプロジェクトを立ち上げ、オリンピックについての学習なども含めたプロジェクトにしたいと語っていた。そのあとブラジルからの実践紹介もあった。

最後に各国からの参加者に、平和を表すジェスチャーについて尋ね、両手を合わせた合唱のポーズ、胸の前で手のひらを90度回転させて組むポーズ、片手でピースサインなど、国によって違う様々サインが紹介された。「平和」を表すジェスチャーもいろいろあることがわかって興味深かった。

4-6 PROFESSIONAL LEARNING THROUGH ACTION RESEARCH

発表者：Margaret Riel(アメリカ) 他4人

iEARN のプロジェクトに参加する教師は、自分自身の実践について評価し、価値づけることは十分なされていない。他者にプロジェクトの成果を伝えるときに、児童生徒の変容について明確にわかれば参加者が増えると思われる。

この足りない部分を補うのがアクションリサーチの考え方である。一般的にアクションリサーチとは「教師が自己成長のために行う行動を計画して実施し、行動の結果を観察して、その結果に基づいて内省する」ということである。このセッションでは以下の流れで説明されていた。

- 1) アクションリサーチの方法を理解すること
- 2) アクションリサーチを実施している実践者から学ぶ
- 3) ラーニングサークルへの参加方法

ここでいうラーニングサークルというのは iEARN のプロジェクトの 1 つで、4, 5 校が 1 つのグループとなって質問を投げかけ、同時に他者からの質問に答えるというものである。参加校は同じ質問を自分以外の 4 校にでき、他の 4 校からの別々の質問に答える義務がある。

このラーニングサークルは自分が質問し、それに答えてもらうことになるので、より具体的な答えやすい質問を精査して尋ねる必要がある。

4-7 MY WORLD 360° : EMPOWERING THE NEXT GENERATION OF SDG JOURNALISTS

発表者 : Lisa Jobson(アメリカ)他 1 名

My world 360° は自分の周りの風景を写真で撮り、自動的に合成して 360 度の写真を作り出すアプリである。このアプリを使うことにより、その場で見上げたり、真下を向いたりしたときに見える映像も併せて 1 枚の写真に表現できる。教育現場でこのアプリを使って児童生徒に表現力を付ける取り組みをしているのが Digital Promise と呼ばれる団体である。本ワークショップでは、会場校の学校を舞台に撮影を行った。今後、自己表現のツールとして臨場感のある映像を制作できるようになると思われる。

4-8 iEARN GIRL RISING PROJECT

発表者 : Allen Written(USA)、関根真理(日本)他 2 人

2017 年度にこのプロジェクトに参加した国は、日本、モロッコ、イスラエル、ウガンダ、インド、ジョージア、アメリカであった。このプロジェクトは、開発途上国の女兒が、男児に比べ十分な教育が受けられないことが多いことを様々な事例を通して理解し、女子が自立して生きられる社会を作るために必要なことを考えていくプロジェクトである。このプロジェクトには本格的な動画教材が準備されている。通常は有料であるが iEARN のプロジェクト参加者は無料で視聴できる。筆者もこの動画教材*2 を視聴した。開発途上国の 8 人の実在する女子にスポットライトをあて再現フィルムとしてさまざまな因習などで教育を受けられない状況や、それを打破し、教育を受け変わっていくさまが表現されている。

その 1 つに、貧しい家庭の女兒が幼いうちから児童労働に従事させられるネパールの“kamulari”制度の事例がある。主人公である SUMA は、兄が学校に行ったのに対して、女子という理由で幼い時に奉公に出され、学校に行くこともできず、奉公先でひたすらその家の家事を行う。16 歳の時に夜学に通うことを許され、その後ソーシャルワーカーの協力でこの制度が違法であることを訴え、ついに SUMA は自由の身となる話である。そのあとも SUMA は児童労働で学校にいけない他の女兒の家の前に立って、この制度の下で感じた気持ちを歌詞にして歌うことで、奴隷奉公で児童労働をなくそうとする活動する。動画自体は複数の国の字幕を選ぶことができ汎用性がある。(日本語は未対応)

このプロジェクト参加者はこのような動画教材を見て実態を学習し、自分たちのできることを考えていくことができるプロジェクトである。

女子が教育を受けられないということはその子どもにも満足な教育ができないということであり、その子どもが女子の場合には、負の連鎖が続くことになってしまう。母親が教育を受けていれば養育の中でその教育の内容が子

どもにも伝わり、教育内容が伝授されることになる。

分科会では、関根真理氏（啓明学園中学校高等学校）からの取り組み紹介（日本からのSkype）があった。その内容は、高校3年「国際理解」の生徒35名がこのプロジェクトに参加し、視聴後、アメリカの高校生とその内容について話しあった後、両国の男女差別、児童労働の有無、格差及び高校生活について紹介したというものであった。2学期はイスラエルやモロッコの高校生とともに別の動画教材を視聴し、意見交換をしたのち、動画のプレゼンを作り学びを共有した。この関根氏の実践はJEARN（iEARNの日本センター）のwebsiteに「iEARN 2017 年度実践報告書」*3に記載されている。

分科会の後半では、プロジェクトに参加したジョージアの高校生が発表し、この動画教材を通して世界中の高校生が児童労働について考え、意見を交換する中で、地球市民として相互のつながりを生み出すきっかけとなった主旨の報告があった。教育を受けることの大切さ、その機会を保障する重要性を訴えた。

4-9 LET'S THINK ABOUT EDUCATION FROM CLASSROOM STYLE (YOUTH SUMMIT)

発表者：沖縄の尚学館高校2年生 4名（日本）

この分科会はユースを対象としたものであり、沖縄の尚学館高校の発表テーマは、国別の教室環境の発表であった。日本の教室の机の配置は、一斉教授型に対応した全員教師のほうを向いて座る座席配置が多いのに対して、イギリスは、机を合わせて小グループで座る話し合い重視の座席配置、フランスは全体での討論がしやすいコの字型の座席配置が多いことを紹介し、分科会に参加した高校生の自国での座席配置を尋ね、その理由も話し合っていた。

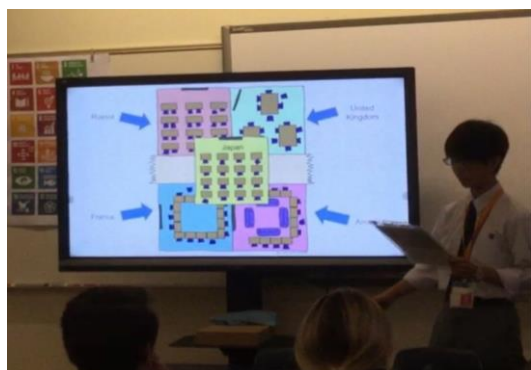


図2 沖縄尚学館高校2年生のプレゼン
ユースを対象とした発表であるため、各国の学校事情を直接聞ける機会としては貴重である。高校生自身が反応を得られる貴重な機会である。

4-10 ⑩ FOLK AND CULTURE PROJECT

発表者：Ayana Tanaka(日本)他1名

このプロジェクトは、過疎化が進み地域の祭りの担い手が減っていく中で、なくなりつつある伝承芸能や民話やダンスなどを発掘し、その継承を図る取り組みを行うものである。発表者は、過去に大学生の時に日本で行われたユースサミットに参加し、世界中から集まったユースと交流することで、各国の伝統文化を紹介する姿勢と英語の重要性について学び、このプロジェクトの支援を行っているとのことであった。日本の発表内容は継承者の減少で継承が難しくなっている「六甲丹生歌舞伎」についての中学校での授業実践の報告であった。分科会では各国の消滅しつつ伝承芸能にどのようなものがあるか、その存続に学校教育がどのように関与できるかなどを話し合った。

今後このプロジェクトの参加者を募り、各国の伝承芸能についてその存続の方法も含めてアイディアを共有していきたいとのことであった。

5 考察

このように iEARN にはさまざまなプロジェクトが存在し動いている。次に、これまでに言及した5つのプロジェクトについて比較検討する。

表2 iEARN のプロジェクトの比較

P 名称	共通教材	活動内容	成果物
① Hiroshima for peace	原爆に関する動画 絵本「まちゃんと」	核兵器の学習 題材：平和	平和に関する絵本、ビデオ
⑤ Hand for peace	過去の平和に関するポスター	作品、ポスター WEB ビデオ会議	手形を描画した平和のポスター
⑥	特になし	グループ単位	調査結果

Learning circle	アクションリサーチの方法（教師）	で活動、質問事項を尋ね、答える活動	の文章及びプレゼン
⑧ Girl rising	Girl rising DVD 開発途国 8 人の少女	感想の交流、プレゼンの実施、WEB ビデオ会議	児童労働のレポート、動画
⑩ Folk and culture	特になし	自国の伝承芸能の調査、活性策、行動 WEB ビデオ会議	調査した伝承芸能のプレゼン

1) 共通教材の利点

7 つのうち共通の学習教材があるプロジェクトは、①と⑧である。共通の教材があるとその教材をもとに学習した後、感想などについて他国と話し合いがしやすい。特に⑧の Girl rising の動画教材の女兒の教育権については開発途上国共通の問題となっており、取り組みがしやすい。

2) 複数校のプロジェクトの利点

5 つのプロジェクトはすべて、複数の学校で交流ができるものであり、1 対 1 の交流だと相手が能動的でない場合は、交流そのものが成り立たない場合がある、その場合でも、もし web にプロジェクトの過去の成果物の蓄積があれば、過去にさかのぼって自分の調査内容とも比較できる利点がある。

3) WEB ビデオ会議の利点

どのプロジェクトも WEB ビデオ会議が実施され、共同学習の意識を付けることができる。実際に顔を見ての話し合いは親近感が持て、地球市民という意識を持つことにつながる。

4) 英語のツールのとして重要性の認識と有用感

意見交換のツールとしての英語は重要であり、学んだ英語で、プロジェクトを進行させる経験は、英語の有用感を味わう上において重要である。

6. まとめ

以上から iEARN のアメリカ大会や、その他の大会で筆者が参加した分科会からわかるプロジェクトの内容について言及してきた。

世界の教育は国連が定めた 2030 年までに解決したい課題である SDGs に向かって動いていることがわかった。

プロジェクトを確実に実行するには、良い教材となるものが必要であり、今回の調査では Girl rising のプロジェクトは秀逸であった。

これらの iEARN のプロジェクトを日本の学校教育に取り入れていくことが必要であると改めて思った。外国からきている高校生は、全大会や分科会で堂々と自分の意見を英語で話し、その会の話し合いの参加構成員となる姿勢が随所にみられた。このような高校生を生み出すプロジェクトが日本にももっと必要だと感じた。

今回 Girl rising に参加している啓明学園の取り組みはすばらしく、国際教育がまさにコンテンツであり、それを学ぶためのツールとして英語が活用されているように感じた。また今回の会に参加している沖縄尚学館の上野先生が引率してきた 8 人の中高生もすばらしく、たくさんの外国の中高生と交流を行っていた。また食堂でほかの参加者が散らかした食器を片づけたりするなど日本の高校生の作法がすばらしいとの評価も受けた。同じ日本人として大変うれしかった。このような場に日本の生徒や学生を多く参加させたいと改めて感じた。

参考文献

- (1) 関根真理 2017 年度 国際協働学習 iEARN レポート
issn2434-0049 pp.13-14
http://www.learn.jp/japan/learn-report/ISSN24340049_2017.pdf
- (2) Girl rising 動画サイト
<https://padlet.com/awitten/v6hjvt5e4d8n>

注

本原稿は金沢星稜大学人間科学研究第 12 巻第 1 号の筆者の原稿から一部を抜粋して掲載。

プロジェクト実践編

5. 「まちんと」と「アンネ」が遺すもの

～戦争体験から次の世代へ二つのJEARN事業～

高木洋子 (iEARN & JEARN)

まちんとを殺さないで！「まちんと」プロジェクトに参加したカナダ小学生がiEARN Forumに投稿した一言である。まちんとプロジェクトは、2006年iEARN オランダ大会で正式にiEARNプロジェクトとして出航し13年目を迎えた今は、Spanishの国々のiEARN-Latinaが主体的に取り組んでいる。ANNEはその巡回パネル展100回目を迎えた。

1 はじめに

昭和15年旧満州で生まれた私が、兵による襲撃・略奪に怯えながら引揚難民として葫蘆島へ辿り着くまでの恐怖の体験は、その後知ることとなった広島・長崎、そしてアンネのホロコストを幼いながらも魂で受け留めたのである。やがて40才に後半になって取り組んだTelecass International (テレビ電話で友達になろう) とその後に出会ったiEARNは、JEARN誕生へとつながり、まちんとプロジェクト誕生の舞台となった。ANNE FRANK House (Amsterdam) とのつながりで、アンネの大型パネル34枚は国内を巡回し、今、80才を前にしてこの2つの事業を次の世代へと渡すときとなった。

2 目的

iEARN-Latinaが主体的に取り組む”Machinto-Hiroshima for Peace”への側面的な支援と彼らの学習成果をiEARN・JEARNでの会議やオンラインで多くの教員と共有することである。それによって「まちんと」を知らない子どもや生徒・教員がこのプロジェクトを通してグローバルなつながりを持ち、第2次世界大戦で現実に起こった人間の大量殺戮を知ることになる。これはANNE FRANK パネル展に於いても同様である。ANNEの僅か15年の生涯とその背景を語る34枚の大型パネルが伝える600万の民族の抹殺が人間の歴史にあったのである。現在、地球が抱える1万4千発の核兵器と各地で揺れる移民・難民問題の人種差別と迫害は、今後どのような経過を辿り、次の世代をどのような場面に遭遇させるのか。ここで歴史の語り人である「まちんと」と「ANNE」に出会う意味を、これらのプロジェクトを通じて一緒に問うていきたい。

3 方法

【まちんと】2冊の絵本：松谷みよ子著「まちんと」・森本順子著「My Hiroshima」を参加希望校へ送付。各クラスでの取組が始まる。iEARNフォーラム”Machinto-Hiroshima for

Peace”へ取組内容や生徒の成果作品を投稿。iEARN World Conferenceや地域・国内会議、Onlineでの発表。

【ANNE】国内のANNE FRANKパネル展開催希望者がANNEカレンダーへ記載。パネル他資材を開催前に配送。展示。次の開催地へ配送（送料負担）。終了後に開催報告書提出（英語・日本語併記・写真・生徒コメント等）。英語版はANNE FRANK Houseへ。日本語版は、ANNE FRANK Meet & Learnサイトへアップ。

4 活動内容

【iEARN Latinaのまちんと活動】Spanish圏のfacilitators: EnidとKristinのリードで進められている—Paraguay, Catalonia, Mexico, Puerto Rico, Argentina

1. 2つのBig Folders

各参加クラス報告と実践内容、まとめなど。

①Machinto en español e inglés como segundo idioma- Sesión 2018-2019

127 comments

②Machinto Project 2018 with Argentina, Catalunya, Mexico, and Puerto Rico

42 comments

2. 「まちんと」10冊、「My Hiroshima」10冊を届ける

3. iEARN Latina Conference 7月開催—まちんと発表と次期参加校募集

4. iEARN Conference 2018

参加・発表・ワークショップ

①英語によるワークショップ (YokoとiEARN Latinaチームとの共同)

②スパニッシュによる発表 (Enid, Kristin, Arlene, Sandra, and more)

③Gift of New Machinto Logo by painter, Blanco Fly Rosado

5. Video Conference

①iEARN-Latina, August 10th

②Video Conference between Paraguay (Sandra) and Japan (Yoko), Sept. 25th

6. Cultural Package Exchange Program

among iEARN-Latina Machinto schools

* UkalineにおけるMachinto Summer Camp
” Sadako and Cranes” by Lubov

News item:

- ① One Day in Hiroshima (Book)
- ② Hiroshima no Pika (Book)
- ③ Brothery Photo (Pope shared with us)
- ④ Chernobyl's Prayer (Ms. Sumida)
- ⑤ Hisoshima photos (Ms. Kurita)

【ANNE FRANK Panel Exhibition 活動】

2018年度開催地

1. May 12-May 15 杉並区高井戸中学校
Swimmy によるANNE 朗読劇
2. May 19-May 20 神戸大学附属中等教育学校
3. June 29-July1 鈴鹿市・鈴鹿市教育委員会
会イオンモール鈴鹿
4. Sept. 29-Nov. 2 ノートルダム女学院京都
5. Nov. 8-Dec. 11 川崎市平和館
6. Dec. 12-Dec. 19 甲南高等学校
7. Jan. 9-Feb. 15 神奈川学園

Ronald (ANNE FRANK House Director) 講演
ノートルダム女学院 4月9日
パネル展100回開催記念 ノートルダム女学院
Stefan VC参加・講演
SwimmyによるANNE朗読劇

New book “アンネのことすべて” 回覧
アンネ写真集
「ものがたりのあるミュージアム」 配送 8冊

5 成果と課題

(1) 成果

【Machinto】

iEARN Machinto forum上に掲載された各種の
成果作品から選んだものである：

- ①margarita_guin_arias (Catarunia)November
<http://pompeu5.pompeufabrasalt.cat/>
- ②Gisselle (Puerto Rico)
Deaf studentsのMachinto学習
<https://drive.google.com/file/d/1LsRRecfb5uNFpQ0WQFrRYv0XoNItn-F/view?usp=sharing>
- ③catherine_mabel_ramoa (Argentina)
<https://view.genial.ly/5aeb17a2d957720ee5b04510/machinto>

【ANNE】 パネル展開催100回記念を到達。
フリーアナウンサー朗読劇サークルSWIMMYとの
共同企画（高井戸中学校・ノートルダム女学院）と実現

(2) 課題

【まちんと】

2冊の絵本に加え、朝日新聞出版、自由と平和
のための京大有志の会による「戦争と平和を見
つめる絵本 わたしの『やめて』」導入と英語
訳取組中。

参加している海外の子ども・生徒・教員からの
フォーラム発信に対して、最も期待されている
日本からの反応が殆どゼロに近い現実が課題で
ある。

【ANNE】

今後の開催地発掘の方法が問題である。特に東
北や北海道での開催実現に向けて努力が必要で
ある。



Talk about Sadako, Ukrainian Summer Camp
By Lubov



神奈川学園ANNEパネル展 #103



6. 防災世界子ども会議 NDYS 2017－2018

～ 気候変動と私たちの住むまちの「防災・減災・復興」～

防災世界子ども会議実行委員会 実行委員長 納谷 淑恵
プロジェクト創設者 岡本 和子

防災世界子ども会議は、2005 年に、ICT を活用した国際協働学習を展開する学びのイノベーション事業としてスタートし、2016 年 1 月より、国連 SDGs 実現に向けた取り組みをスタートした。2016 年 8 月、新潟での防災世界子ども会議（琴リニピック同時開催）に続き、2017 年には、モロッコで開催されるアイアーン国際会議・ユースサミットにて、防災世界子ども会議 2017in モロッコを、2018 年 7 月には再び、新潟にて防災世界子ども会議（琴リニピック共催）を開催した。2018 年の NDYS 宣言作成には、金沢星稜大学学生の協力を得、世界各国からのプロジェクト参加生徒のアイデアを一つにまとめていただくなど、活動に新しい広がりがでてきている。

1. はじめに

阪神・淡路大震災から 10 年を機に「大震災の教訓を世界の子どもたちに伝えよう、命の尊さを考えよう！」と、ひょうごの子どもたちの交流から 防災世界子ども会議プロジェクト(英語名 Natural Disaster Youth Summit 以下 NDYS)は始まった。その目的は、「コミュニケーションが命を救う！」をスローガンに、災害が引き起こす惨状に目をむけ、子どもたちが、命を守る重要性に気づき、命を守る判断、行動、備えができることである。第 1 回会議 NDYS2005 で、グローバルな防災教育ネットワークの基礎を築き、それ以後も、様々な方々の協力を得、2019 年で、足かけ 15 年国際協働学習を継続している。

2. 目的と方法

2-1 目的

防災世界子ども会議は、世界と学び合う国際協働学習を通した防災教育の促進を目的とするプロジェクトである。インターネットをはじめとする ICT(情報通信技術)を活用して、世界の小中高校の子どもたちが、さまざまな国・地域の防災の知恵や災害から学んだ教訓に関する「情報」を共有し、学び合い、自然災害の「防

災・減災・復興」という地球規模の課題解決に取り組む、その成果を 世界へ、未来へ発信することを目的とし、半年間のネット上の国際協働学習の後に、総仕上げとして「会議（発表会）」をもつ。そのミッションは、地球規模の防災意識を共有しながら、持続可能な開発目標 SDGs に向けたそれぞれの国・地域の防災への取り組みに世界と共に取り組むことである。

2-2 方法

iEARN コラボレーション内の NDYS フォーラムでのディスカッションや、インターネットテレビ会議で互いのプロジェクト進行状況を報告し、協働学習を進める。最終発表会直前には、facebook も用い緊密な連絡を取り、プロジェクト発表会を行う。

対象：小学校・中学校・高等学校

期 間：2017 年 9 月から 2018 年 8 月

3. 活動内容

防災世界子ども会議では、プロジェクト参加校が、それぞれの地域の過去の災害を調査し、災害安全マップ作り、キッズ防災バッグ作り、アイアーンフォーラムでの意見交換などを行ったあと、発表会を行う。2018 年は、7 月に、琴

2018 年度 JEARN 実践報告書

リンピックとの共催により新潟県新潟市にて「防災世界子ども会議 2018in 新潟」を開催した。

新潟県では、阪神・淡路大震災の9年後、震度7の大地震が中越地方で発生するなど大きな被害を受け、その都度、力強く復興を遂げた歴史がある。日程は、7月19日(木) -23日(月)の5日間で、12カ国・1地域の子どもたち及び教師が集い、同じ宿舎に宿泊し、日本の中学校を訪問したり、発表会を行ったりした。

事業参加者数

海外12カ国・1地域より発表者 100名
学校訪問：新潟市立南浜中学校生徒 100名
宣言文発表会及び災害安全マップ展見学者 約850名

3-1 NDYS2018 成果発表



写真1 成果発表の様子



写真2 成果発表の様子

3-2 災害安全マップ発表

プロジェクト参加校が持ち寄った災害安全マップは、リュートピア会場に展示され、会場を訪ねた多くの観客に見ていただくことができた。各国様々な工夫がされた見ごたえのある作品が並んだ。



写真3 災害安全マップ

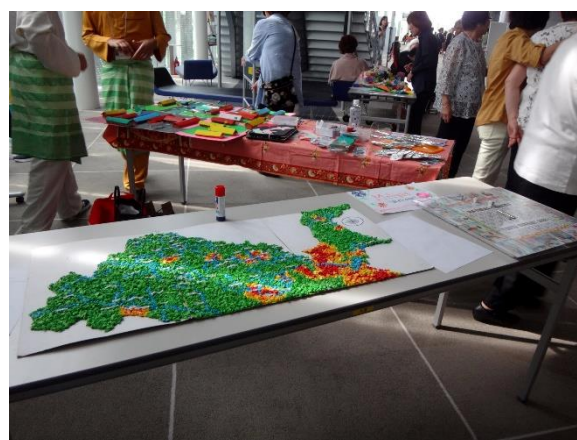


写真4 災害安全マップ展示の様子

3-3 NDYS2018 in 新潟宣言発表

NDYS 宣言作成には、金沢星稜大学学生の協力を得、世界各国からのプロジェクト参加生徒のアイデアを一つの文にまとめたものを、各国代表生徒がステージで発表した。以下がその原文である。

宣言文

Declaration of NDYS2018

The world will be a better place to live in if we, as students take full responsibility now.

To further understand the awareness of the risks of flood in the area and ways to overcome this disaster.

To nurture the students about the safety rules when confronting a flood.

To increase the awareness of the community in handing the situation when a flood occurs.

To initiate a proper and efficient standard operating procedure (SOP) to the authorities as well as teaching

2018 年度 JEARN 実践報告書

people the best ways in facing such disaster.

To realise that everyone must be involved in erecting a safe environment in this area.

To ensure that children have their place in giving opinions and ideas in the country.

We must to take care of our so small, but beautiful, amazing and great earth.

Educate kid to live environment for their own good.

Save water, tree and clean air atmosphere.

3R

Vincent tan

Keep nature and your future

Don't litter

Pant more

Try your best

PM2.5

Historical building of each country

We are the fighters for environmental protection.
welcome to our organic world.

Welcome to Organic world.

Declaration

The world will be a better place to live in if we, as students take full responsibility now.

So, We have mainly 3 opinions about water, tree and atmosphere.

First, Many people can't get safety water in the world. We need it because of our health and grow crops. But, water pollution and water shortage are increasing now. So, we should live without wasting it.

Next, We should protect tree for our future. The role of Tree is to clean air and to do rich ecosystem and water resource. So, Let's plant tree and stop overcutting of forest .

Finally, We must try to stop Atmospheric pollution. PM2.5 and Exhaust gas harm people and animals. So, It's important to understand the awareness of the risks of atmospheric pollutions.

Therefore, We are the fighters for environmental protection. Let's break through and road to our organic world.

和訳

つながりのある世界へようこそ

宣言

私たちがこれからの未来のために、十分な責任をもし果たすことができれば、世界はより良い場所になるでしょう。

そのために、水と木と大気にかかわる三つの重要な提案をします。

まず初めに、世界ではほとんどの人たちが安全な水を使うことができません。私たちの健康のため、また作物を育てるためには水が必要です。しかし、今現在水質汚染と水不足が進行しつつあります。それゆえ、水を汚さず大切に使うライフスタイルを確立することが必要です。

次に、私たちや私たちの子孫のために森林資源を守るべきです。森林には、空気をきれいにすることと生態系や水資源を豊かにする役割があります。それゆえ、森林を乱伐せず、緑を増やす取り組みを促進していきましょう。

最後に、私たちは大気汚染を止めるようにしなければなりません。PM 2.5 や排気ガスは人々や動物を害します。それゆえ、大気汚染の危険性に気づくことが重要です。無駄にエネルギーを使用せず、地球にやさしい行動を心掛けましょう。

以上のことから、私たちは環境を守るための戦士となり、現状を超えて、つながりのある世界へ出発しましょう。

4 成果と課題

日本を含む 13 カ国・1 地域から集まった生徒及び教師 100 名は、それぞれの国の文化や事情、そして防災学習内容を発表し、互いに学びあうことができた。また、開催地新潟の文化も学ぶことができた。同じ宿泊施設での異文化の人々との共同生活を通して互いの親睦を深めるとともに、国際的に活躍できる防災のリーダーとしての素養を身につけることができた。また全国から参集した大正琴愛好家及び観客 850 名以上の方々に世界各国の防災について紹介するとともに、音楽を通して、異文化間、異世代間の交流も行うことができた。

また、2018 年の NDYS 宣言作成には、大学学生の協力を得、世界各国からのプロジェクト参加生徒のアイデアを一つにまとめていただくなど、活動に新しい広がりもでてきた。以上のように多くの成果があげられる。

課題としては、日本の参加校が少ないことがあげられる。今後は、間口を広げより多くの日本の生徒が参加できるようにしていきたい。

7. 第2回 世界大正琴交流大会 ‘琴リンピック 2018 イン新潟’ 報告

テーマ 大正琴の輪は 未来を拓く 防災の輪

— 語り合えば 信じ合える —

アイアーン大正琴プロジェクト代表 廣 田 元 子

アイアーン大正琴プロジェクトは、2009年ジェイアーン理事会の承認を得て、2010年「アイアーン カナダ国際会議」からスタートした。

ICT (information and communications technology) を活用したグローバルな活動を推進し世界の子どもたちや、先生方の顔が見える国際交流、異文化交流学習を目指して活動をしている。主な活動は、世界各地での大正琴交流会開催、テレビ会議やホームページで会議をしたり、弾き方を紹介したりしている。訪問した国の学校や先生方に大正琴の寄贈等を行っている。「第一回世界大正琴交流大会琴リンピック2016イン新潟」を開催した。

1 はじめに

アイアーン大正琴プロジェクトは2009年に大正琴の発祥の地である名古屋市立の小学校で勤務していた私が定年退職を機に立ち上げたプロジェクトである。

その理由の一つ目として、大正時代から多くの人に愛されてきた大正琴の楽器が、日本で発明されたにもかかわらずその事実は教科書のどこにも記載されていない。調べているうちに、楽器が海外にも大量に輸出されていて、現在も輸出先では名前を変えて販売されているらしい。

二つ目として、大正琴プロジェクトは、2005年阪神淡路大震災記念事業として「防災世界子ども会議」が兵庫県で発足し、「防災世界子ども会議インひょうご」に世界から50人が招待され、淡路島の夢舞台で子ども会議が開催された。名古屋の小学生達と2003年9月からプロジェクトに参加し、初めて防災教育について勉強をする機会を得、その後、台湾会議を経て防災教育の重要性を感じ、2007年には愛知県開催に手を挙げ実行委員長としてロシア、イラン、インドネシア、ネパール、トルコ、スロバキア、アメリカ、台湾から68人を招待し、「愛知県美浜少年の家」において、5月3日～5日の「防災世界子ども会議 2007 インあいち」を開催した。実践を続ける中で、「災害はいつ起こるかわからない。起こった時に落ち着いて自分の『心のケア』が

できる何かを持っていなければ生きられない」と感じ、「防災教育 音楽の力 心のケア」を生涯教育と絡み合わせて探るうちに大正琴に辿り着いた。

三つ目としては「琴リンピック」に出会えたことによって改めて音楽の力、人間ネットワークの凄さ、強さを知った。

2014年5月からは新潟市に本部を置く琴リンピック実行委員会と防災世界子ども会議実行委員会と協働で活動をし、2016年には「第1回世界大正琴交流大会 琴リンピック 2016 イン新潟」を開催し、世界から約100の子どもたちと先生を招待し、大正琴の演奏交流発表と防災子ども会議が開催された。

2018年も「第2回世界大正琴交流大会琴リンピック 2018 イン新潟」が7月22日(日)に新潟市リゅうとぴあコンサートホールで開催された。その模様はインターネット上で報告書されている。(琴リンピック <http://kotolympic.com/>)

2 目的と方法

2-1 目的

- ① 「世界に大正琴の輪を広げよう」
- ② 「大正琴の輪は 未来を拓く 防災の輪」
- ③ 「語り合えば 信じ合える」

3つのテーマで活動をした。

2-2 方法

①の活動方法: 国内のみならず国外の小中高等学校及び、幼稚園、大学や一般のサークル等の授業やクラブ活動、イベント等に大正琴を組み込み大正琴の輪を広げる実践をする。

②の活動方法: 音楽の力と、自分の命を守る方法を考える会議の開催。

③の活動方法: テレビ会議をはじめとする ICT (情報とコミュニケーション技術) を活用した新しい仕組みで、各国と大正琴交流や防災会議。

3 活動内容

海外へ大正琴贈呈数 2014～2019年4月現在

日本全国から寄贈された大正琴 560 台。メンテナンス後海外へ贈呈 317 台

2014 年 11 月ごろから、順次ボランティアで清掃、メンテナンス

2015 年 2 月現在 90 台、4 月現在 120 台、9 月現在 180 台…10 月総数で 200 台突破。

2016 年 1 月現在 236 台、2 月 240 台…

毎年数回ボランティアで集まり、大がかりで大正琴を清掃、メンテナンス。

2017 年以降も送られてきた大正琴を順次メンテナンス、合奏用や電子大正琴は保管、壊れていて修復不可能なものは部品取りとして使用。

2018 年の琴リピックで 87 台寄贈。

成果

2019 年 4 月までで 317 台が海外の生徒や先生方に寄贈された

献琴に協力した道府県(26) 560 台

北海道 岩手県 秋田県 福島県 群馬県 埼玉県 千葉県 神奈川県 新潟県 石川県 長野県 静岡県 愛知県 滋賀県 大阪府 兵庫県 奈良県 島根県 岡山県 愛媛県 福岡県 佐賀県 長崎県 熊本県 大分県 鹿児島県

贈呈した国・地域(24)

中国 イラン インドネシア ロシア オランダ インド ベトナム モンゴル フィンランド コロンビア アメリカ オーストラリア トルコ ネパール ブルガリア イタリア マレーシア マリ(アフリカ) 台湾 日本 モロッコ シンガポール ウクライナ アゼルバイジャン

この運動のために訪問した国

2015 年中国(深圳市の小学校の代表)、モンゴル(ウランバートルの北東アジア国際観光フォーラムで演奏、セコンダリースクール 115、日本センター、

大地の家)、フィンランド(ヘルシンキのサバイ劇場で演奏、ラルカンスウェディッシュ高校訪問)

2016 年 ベトナム(バクザンのジャパンフェス、コンベンションホールで演奏)、台湾(高雄の瑞祥高中、正義高中)

2017 年 モロッコ(マラケシュのアイアーン国際会議で演奏、ユースサミットで指導)、モンゴル(ウランバートルのエトウゲンスクール訪問)

2018 年 シンガポール(国立シンガポール大学)、オーストラリア(アデレードのブライトンセコンダリースクール、イマニュエルカレッジ、メルボルンの新潟総領事公邸レセプションで演奏)、マレーシア(クアタンのセントトーマスセコンダリースクール)、シンガポール(さくらジャパン)に出演

2019 年 ロシア モスクワ ジェルジンスキー市の児童音楽学校訪問、アトリウム(アトリウム)のさくら祭りに児童と一緒に演奏

4 成果と課題

成果として、「琴リピック」開催までの道のりは世界を繋ぐ大変な草の根活動ではあるが、参加者全員が、次も参加したいと意欲を見せている。その意欲にあふれた笑顔が一番の成果だと考えられる。

※別紙報告書には参加者やボランティア活動の感想等も載せてあるので読んで頂きたい。

今後の課題は、新潟市や県からの補助金が出るのは 2 回までで 3 回目からは出なくなるため、募金だけに頼らなければならない。琴源(本名金子秀樹)さんは講演やコンサート等で募金を呼びかけ、1000 円以上募金をしてくれた人には自身で演奏録音をした CD をプレゼントし 2020 年 8 月 23 日(日)りゅうとぴあコンサートホールでの開催に向けて日々努力を重ねている。また、昨年「アイアーン大正琴プロジェクト」を閉じることを総会で報告し承認を得たが、その後の話し合いで「琴リピック」実行委員長である琴源さんがプロジェクト代表を引き受けて下さることになり、私は琴源グループの一会員となり今後もしできる限りのお手伝いをさせて頂くこととなった。

現在の予定として、海外の学校と ICT を使った交流や訪問は 2019 年から、参加者募集は 2020 年 1 月からの予定である。

開催期間 2020 年 8 月 20 日～24 日

宿泊施設: ゆいぽーと新潟 児童生徒のみ宿泊

8. 青少年ペンフレンドクラブ (PFC)

—海外文通の取組—

日本郵便株式会社
郵便・物流事業企画部 切手・葉書室
青少年ペンフレンドクラブ

青少年ペンフレンドクラブは「Peace（平和）」「Friendship（友愛）」「Culture（教養）」の三信条を基に、国内はもとより世界中の人々と「手紙のやりとり」を通じて友情を深めるとともに、世界中で起こる様々なことに関心を抱き、思考を巡らせ、また、意見を交わすことにより、平和な社会の構築に取り組むクラブである。1949年6月に「郵便友の会」として発足し、現在は手紙文化振興という観点から、弊社が運営している。

PFC(青少年ペンフレンドクラブ)・海外文通・ペンパル紹介・会報誌 (Letter Park) ・国際交流

1 はじめに

手紙を通じた国際交流活動の促進として、iEARN（アイアーン）及びJEARN（ジェイアーン）のネットワークで展開するPFC海外文通プロジェクトにて交流を呼びかけ、児童・生徒のペンパルリストを入手、PFC会員との海外文通活動に取り組んでいる。

なお、2018年5月に施行された「GDPR（一般データ保護規則）」（EU域内に在住する個人の「個人データ」の「処理」と「域外への移転」を規制する法律）に伴い、当会においても本規則に沿った体制構築のため、2018年11月～2019年3月まで、海外からの新規申込受付を休止した。

2 目的

手紙のやり取りを通して、国際親善、国際理解、相互理解の促進に努めることを目的としている。

5 成果と課題

2017年度に続き2018年度もiEARN及びJEARNのネットワークから多くの方をご紹介いただき、当会員と手紙のやり取りを通して海外交流の橋渡しができた。また、過去の掲載校からの再掲載や追加掲載依頼が続き、当プロジェクトの活性化に繋がった。さらに、PFC会員が積極的に海外文通に取り組めるよう、会報誌への英文手紙の文例紹介や、文通実践者による体験談を掲載したことにより、海外文通初心者からの申込も多く見られた。

3 方法

毎月発行の会員情報誌「Letter Park」の「海外ペンパル紹介コーナー」に、毎回約50名分の文通希望者情報（国名、名前、年齢、趣味等）を掲載。PFC会員からの紹介申込受付後、当会から申込者に希望相手の連絡先をお知らせし、手紙の交換（文通）を行う。

しかしながら、海外の学校団体からの複数申込みに対し、PFCグループからの反響が薄く、団体同士の交流には結び付かなかった。また、当会にて昨年度実施した「GDPR対応」に伴う新規申込受付停止による影響も見受けられた。

4 活動内容

2018年度（2018年4月～2019年3月）においては、iEARN及びJEARNのネットワークを通じて得た356名の海外ペンパルリストを会報誌に掲載し、PFC会員からの文通申込みは143件であった。（「表1」参照）

2019年度も引き続き、紹介目標数2,000件に向けて、PFC会報誌等を通じて海外文通への取組を働きかける。

表1 2018年度 海外文通の取組 iEARNからの申込みに対する掲載・紹介数

掲載号		国名	学校名	掲載数	紹介数
2018 年	5 月	台湾	Jing Long Elementary School	67	14
	6 月	スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	49	28
		台湾	Tainan Kuang Hua High School	31	4
	7 月	台湾	Taichung Municipal Chung-Lun Junior High School	14	3
		台湾	Jing Long Elementary School	33	15
	8 月	台湾	Jing Long Elementary School	26	5
		スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	34	16
	9 月	台湾	Tainan Kuang Hua High School	27	6
		スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	19	5
	10 月	スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	12	13
12 月	スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	6	4	
2019 年	2 月	フィンランド	Kyröskoski Primary School	6	13
		スロベニア	Osnovna š ola Kuzma	7	4
	3 月	スロベニア	Osnovna š ola Grad	12	7
		フィンランド	Kyröskoski Primary School	6	6
		スロベニア	Osnovna š ola Kuzma	7	0
合計		3 カ国	7 校	356	143

小学校実践編

9. My School, Your School Project

ー Tokyo2020 の取り組みを入れて ー

滝沢 麻由美（東洋学園大学）

本報告は、2018 年度に筆者の支援校である東京都の小学校で、都教委のオリンピック・パラリンピック教育の1つである「世界ともだちプロジェクト」の一環として、iEARN の My School, Your School Project に参加した活動についてである。高学年の児童たちが Tokyo2020 を紹介するカードを作成し、筆者が国際会議でそれらを渡した海外のメンバーたちとのやり取りをプロジェクトのフォーラムで共有した。この中で児童たちには、Tokyo2020 をより知り、発信しようとする態度が見られた。

Tokyo2020 オリパラ教育 国際理解教育 iEARN 国際会議 新プロジェクト

1 はじめに

2020 年の東京オリンピック・パラリンピックがあと 2 年となった昨年度、東京都を中心としたオリンピック・パラリンピック教育が引き続き実施されている中、Rio 2016 のときからスタートしたオリンピック・パラリンピックをテーマとした国際理解教育をめざす本実践も 3 年目を迎えた。2017 年度は、都教委の施策の 1 つである「世界ともだちプロジェクト」の一環となるよう、4～6 年生グループは、iEARN の国際協働学習プロジェクトの 1 つである Teddy Bear Project、1～3 年生グループは、Holiday Card Exchange Project に参加した。そして 2018 年度は、1～3 年生グループが Teddy Bear、全学年グループで Holiday Card Exchange、さらに 4～6 年生グループに、My School, Your School Project を取り入れた。今回は、この活動について報告する。

2 目的

- (1) 4～6 年生の児童たちが、Tokyo 2020 についてのさまざまな内容について学び、その成果物を作成すること。
- (2) それらを海外の iEARN メンバーに発信しようとする態度を促し、そこでのやり取りを経験させること。

3 方法

(1) 参加対象

大田区立馬込小学校学校地域支援本部主催

「土曜英語教室」参加の 4～6 年生グループ 7 名と、海外の iEARN メンバー 7 名。

(2) 交流期間

2018 年 7 月から 2018 年 10 月まで。

(3) 考察・観察の対象

児童の成果物である Tokyo2020 についての紹介カードと、フォーラムに投稿した記述、及び、海外の iEARN メンバーからのビデオメッセージについての考察。また、授業者（筆者）による児童の行動観察。

4 活動内容

(1) 2018 年 7 月の「土曜英語教室」

Tokyo 2020 の内容とその学習言語（英語）を学び 1 人 1 枚ずつ、その紹介カードを作成。

- ・「2 Years to Go! キャンペーン」(2 Years to Go! Campaign, open)
- ・「都市鉱山からつくる！みんなのメダルプロジェクト」(Medal Project, Let's Recycle!)
- ・「東京五輪音頭 -2020-」(HAPPY&PEACE, Let's dance together!)
- ・「日本の木材活用リレー～みんなでつくる選手村ビレッジプラザ」(Japanese wood, use, relay, village)
- ・「東京 2020 オリンピック新競技」(Olympic new sports, surfing, sport climbing, skateboarding, baseball/softball, karate)
- ・「東京 2020 公式マスコット」(official mascots, Miraitowa, Someity)



(写真1 & 2 児童が作成したカード)

(Let's introduce Tokyo2020 to schools around the world! What do you know about Tokyo 2020?)

(2) iEARN 国際会議 (バージニア、米国)

同月に、筆者が発表者として参加。2つおこなったうちの1つが、前述のオリパラ教育の一環となるよう、アイアーンのプロジェクトに参加していることに加えて、オリンピック・パラリンピックをテーマにした新しいアイアーンのプロジェクトの提案を含んだポスター発表であった。そして、その発表を見に来てくれた Youth Summit 参加の高校生2名(米国、ウガンダ)を含む海外メンバー7名(米国3名、ネパール、ブラジル)に、カードの内容を紹介して渡し、各々のビデオメッセージを撮った。



(写真3 ポスター発表の様子)



(写真4 ネパール) (写真5 ブラジル)

(3) 2018年9月と10月の「土曜英語教室」

7人のビデオメッセージを視聴し、自分たちからのお礼(Thank you for your message!等)と、その国の学校等についての質問をいくつか

考えた(一部英語 What sport is popular?等)。筆者が全体を英訳し、My School, Your Schoolのフォーラムに、この一連の活動を紹介する内容を投稿した。一部の海外メンバーとは連絡がつき、更にそこでコメントをもらったりした。

5 成果と課題

(1) 成果

前述の「2 目的」に沿い、まず(1)は、筆者が準備した内容によく関心を示し、興味を持って聞いたり、その紹介カードでは、学習言語の他に日本語での説明文を自分のことばで書くよう指示したが、それぞれがとてもよく表現できていたり、イラスト等にもよく工夫が凝らされていた。

(2)については、発信としてのことばもよく組み込まれていた(「メダルプロジェクトへのみんなの想いでTokyo2020が輝き出します」等)。また、自分の紹介カードを手にし、自分の名まえを呼びながらメッセージをくれる海外メンバーの姿が大きな印象を残したようで、この活動を通して良い経験ができたのではないかと、思う。筆者自身も新プロジェクト発足のための最初の大きな一歩となった。

(2) 課題

1ヶ月に1回というスケジュールのこともあり、表現活動や振り返りにもっと時間がほしいところであった。また、帰国後に連絡の取れなかった海外メンバーもいたので、新プロジェクトでは、このような点にも配慮しつつ、メンバー間の協働が、Tokyo2020に向かってより良くなっていけるよう進めていきたい。

参考文献

- Takizawa, M. et al. (2019). The Olympics & Paralympics in Action Project. iEARN 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会公式HP (2018)
- 町田淳子・滝沢麻由美 (2019) 『英語で学ぼう オリンピック・パラリンピックーCLILによる国際理解教育として』(子どもの未来社)

10. 単級学校での国際交流の意義

単一的なものの見方を広げ、自分たちの地域の良さを再認識する為に

角納 裕信（金沢市立大野町小学校）・清水 和久（金沢星稷大学）

「生徒指導の三機能」を生かしながら、学級経営や授業を組み立てていく際、①自己決定 ②自己存在感 ③共感的人間関係 の3点が大切である。本校は1学年1学級の単級である。そのため、人間関係が固定化されがちであり、クラス替えがないため、リフレッシュする機会に恵まれず、視野も狭くなりがちである。この点を解消し、台湾の同学年の交流相手と「文化交流」することにより、ものの考え方の幅が広がり、自分たちの地域文化の良さについて再認識することができた。

TeddybBearProject 地域伝統芸能文化 LINE Christmas&HappyNewYearCard 交換

1 はじめに（本校の背景）

本校は、金沢市にあり、「金沢港」「いきいき魚市」や「醤油工場」「古い蔵」、「大野弁吉からくり記念館」等がある、観光の街である。

国際交流上で良い点は、①商売繁盛や大漁を祈願するための日吉神社さんへ奉納する山王悪魔払い、獅子舞、豊年太鼓などの「伝統芸能」、②そして醤油の街ならではの「醤油作り」、③海の近くなので環境教育などの「海洋教育」とたくさんの発信する事柄があることである。

反面、休日には、観光客でにぎわうが、昔から住んでいる人口は少ないので単級学校であり、新しい刺激がない為、人間関係が固定化してしまいどうしても発想などが収縮してしまうことである。

2 目的（どういう姿を望むか）

実体験や他との関わりを増やし、その中から、自分たちを比較し、違いを見つけ出し、より豊かな思考を育てていきたいと考えた。

3 方法（どのように仕掛けていくか）

本校の弱点を克服し、強みを生かしていく。具体的には、クラス替えがなく刺激のないところに、刺激を与え、地域文化の良さを発信していく。

（1）交流相手を知る

（2）台湾からの交換留学生の目を通してのホームステイ

（3）Card 交換

4 活動内容

（1）交流相手を知る

「台湾」という国について知る時間を設ける。親日国であるということ、中国でありながら中国とは微妙な関係にあること、学年の始まりが9月であるということ等を教えた。

（2）台湾からの交換留学生の目を通してのホームステイ

①醤油づくりと一緒に体験する。



図1；Mochi（台湾からの交換留学生）と一緒に小麦と大豆と酵母菌を混ぜ、醤油の元を仕込んでいるところ

②食文化、日本文化、日常生活について交流する。（実際に体験して）



図 2；客人をもてなす蟹料理

③伝統芸能としての悪魔払いや太鼓について知る。

(3) Card 交換

Christmas & Happy New Year Card の交換をする。27 人の児童数なのだが、台湾の先生の方で人数を調整してこちらの人数に合わせてくれる。出席番号で 1 対 1 対応にしてある。自分の出席番号と同じ児童と実際に手紙のやり取りをすることになる。



図 3；台湾からカードとプレゼントが届いた！

5 成果と課題

(1) 成果

一部、子どもたちの感想だが、
○ペアから手紙をもらって、やさしく質問してくれたりすることで、私と同じチョコレートが好き、ということが分かった。
○地域文化である「悪魔払い」を紹介することができた。

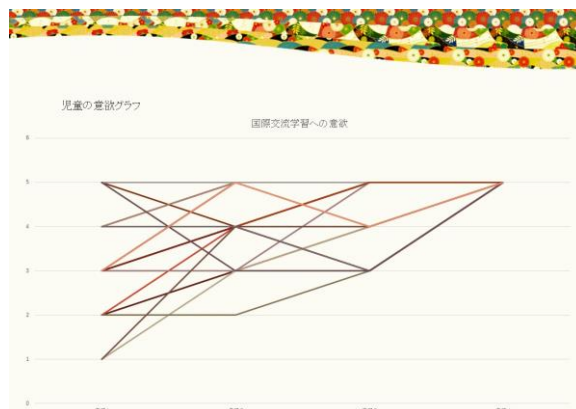
相手のことを調べ、仲良くなる力が付き、自国の伝統文化を調べ、体験し、発信する力が感じられた。

また国際交流への意欲の高まりであるが、4 段階評価を以下の各項目についてアンケートを取った結果、

アンケート項目

- ①醬太郎を台湾留学させた。
 - ②Mochi をホームスティさせた後
 - ③クリスマスカードを受け取り、書いた。
 - ④星稜大学学生さんから報告会があった。
- そして、
- ⑤自分に、この交流を通してついた力は？

表 1；国際交流学習への意欲度



項目 5 に関しては、上に記述したとおりである。1～4 項目中、学生さんからの報告に関して、児童全員が意欲度 4 と答えた。

(2) 課題

決められた時間数の中で行っていかなければならないので、前年度のうちに教育課程上に位置付けておく。ホームスティさせるにあたっては、保護者の理解と協力が必要である。

11. 第2回 世界大正琴交流大会 琴リンピック 2018 イン 新潟

下村（江目）愛（地域参加者 Tokyo Kids 代表）

1 琴リンピック概要

大正琴は日本人が日本人のために作った唯一の楽器であり、高齢化している大正琴の担い手を若い人達や海外の子どもたちに広めたいという考えを形にしたのが「世界大正琴交流大会 琴リンピック」である。大正琴を全世界に広めるべく、全国から集まった不用となった大正琴をボランティアで再生し、世界の子どもたちにプレゼントする「大正琴を世界に広げよう運動」のシンボルとして大会は 2016 年から 2 年ごとに開催されている。2018 年 11 月 1 日現在で海外へお嫁にいった台数は 310 台にのぼっており、大正琴をプレゼントされた海外小中高生が来日し、この日のために練習した曲を披露する。

【2018 年 開催概要】

期間：7 月 19 日（木）-23 日（月）

ワークショップ学校訪問：新潟市立南浜中学校

大正琴の交流演奏：琴源ビル

カルチャーナイト：ホテル イタリア軒

演奏発表：新潟市民芸術文化会館

りゅーとぴあコンサートホール

参加者国：マレーシア、イタリア、ネパール、ブルガリア、シンガポール、インドネシア、ベトナム、アメリカ、中国、モンゴル、ウクライナ、オーストリア、台湾、日本など 約 100 名

2 参加経緯

筆者は普段は東京都私立中高で英語教員を務めていることから JEARN と出会い、栗田智子先生主催の Holiday Card Exchange プロジェクトに自身の子どもと参加した際に琴リン

ピックを知ることとなった。大正琴に惹かれたポイントは以下の 4 点である。

- ① 日本固有の楽器である
- ② 軽くて持ち運びしやすい
- ③ 馴染みのある曲の楽譜が充実している
- ④ 子どもでも外国人でも簡単に弾ける

この大会で、世界共通語である音楽と英語でコミュニケーションを取ることの楽しさを子どもたちに体験させたいと思い、運営委員長の金子秀樹さんと廣田元子先生にお会いしてぜひ参加させていただきたい旨をお伝えし、快諾していただいた。「当日、ステージで演奏するのはママと子どもの全員」という条件に少々不安を感じながらも、近所に住む小学生の子どもとママたち（ママ 4 名、子ども 6 名）で地域参加者グループ Tokyo Kids を結成し、めでたく参加の運びとなった。

3 準備

Tokyo Kids メンバーは全くの大正琴初心者であったため、東京在住の今井真美さん（金子秀樹さんの娘さん）が全面的にサポートして下さった。2 か月に 1 回のペースでお互いの家や近所の交流館に集まり、遊びたくてうずうずしている子どもたちをお菓子で釣るなどして練習を重ねた。案の定、子どもたちは上達が早く本番前には暗譜できるまでになっていたが、ママたちの方が今井先生に励まされながら必死の形相で本番直前まで練習に臨んでいた。子どもたちと同じ土俵に乗り一緒に新しいことにチャレンジするのは新鮮な経験であったのと同時に、音が一つになった時の喜びはひとしおであり、親子の絆も強くなったのは嬉しい誤算

であった。

また、演奏発表の前日に行われるカルチャーナイト（各国参加者との会食・ステージでのパフォーマンス）の準備も同時進行で行った。小学生ができる「日本らしいパフォーマンス」とは何かについて話し合い、子どもたちのそれぞれの得意技（空手演技、けん玉、コマ、まりつき）を披露することとなった。当日は子どもたちが各国のテーブルを回って自由に交流をする時間があると聞いていた。「英語がほとんど話せない中、どうすれば交流できるか」を考えていた矢先、挨拶をしながら手土産（折り紙やアメ）を渡して子どもたちの名前（表記、意味）を各国の言語で書いた紙を用意し、自己紹介するという方法を思いついた（阿部志乃先生の「My Name プロジェクト」実践報告からヒントを得た）。

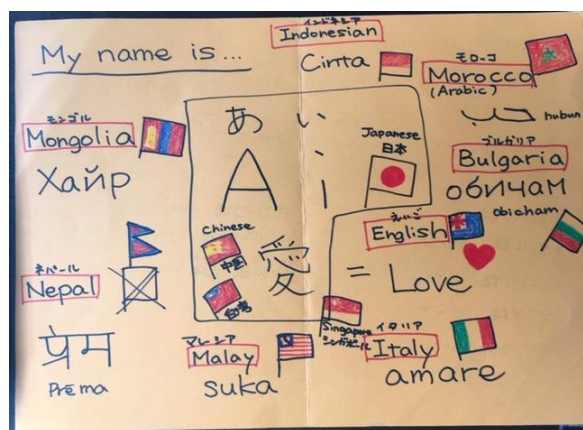


写真1 自己紹介用に作成した My Name

4 カルチャーナイト&琴リピック本番

おいしい新潟のお料理に舌鼓をうちながら各国のダンスあり、歌あり、スライドを使った文化紹介ありのパフォーマンスを鑑賞するカルチャーナイトは最高に楽しい時間となった。Tokyo Kids のパフォーマンスも会場を盛り上げることができ、成功で終わることができた。本番に強い我が子たちの逞しさに驚きつつ、母たちは胸がいっぱいになった。各国のテーブルを回っての交流では子どもたちは目を輝かせ

ながら忙しそうに動きまわり、終始笑顔で心を通わせていたこの日は深く子どもたちの思い出に残ったようだ。



写真2 カルチャーナイトでの交流の様子

いよいよ琴リピック本番。大舞台上で観客の前で演奏するのは大変な緊張を伴ったが、「大正琴が好き」という仲間とステージを作り上げた喜びと達成感のほうが勝った。各国の参加者は自国の曲を奏でたり、母国語で歌いながら自国の曲を弾いたり、大正琴が世界に飛び立って新たな文化で発展を遂げている様子が見られたのが大変興味深かった。また、新潟市の大正琴愛好家の方々や全国子供大正琴コンクールソロ部門で4連覇、文部科学大臣賞受賞者の江本愛夢さんの演奏発表もあり、大正琴の奥深さを学ぶことができたのも大きな収穫であった。

5 第3回 2020 年に向けて

2 日間の慌ただしいスケジュールを終えて新潟駅から無事に東京行きの新幹線に乗り込みホッと一息ついた頃、子どもたちに「次の第3回大会は2020年だけど、また参加したい？」と聞いてみたら、「したい！！」と即答が返ってきた。ママたちも「うん、大変だったけど、参加して良かったからまた頑張ろうか！」と前のめりに。こうして2020年参加に向けて再び始動することが決定した。

中学校・高等学校実践編

12 2018年iEARN Virginia 大会参加報告

生徒の主な活動

上野 浩司（アイアーン沖尚）

アイアーン沖尚が16年間参加してきた世界大会は昨年、アメリカのVirginiaで行われた。この大会で、2つのプレゼンテーションとアジア代表としてキーノートスピーチをこなし、この間の活動の評価として、特別表彰をいただいた。

生徒の活動を中心として、この報告をするとともに、2021年には活動の最終成果として、沖縄で世界大会を開く予定で活動していることをお知らせする。

世界大会 プレゼンテーション キーノートスピーチ 表彰 2021年沖縄大会

1 はじめに

アイアーン沖尚としての世界大会参加は、2003年以来、16年におよぶ。最初はただ参加するだけ、教師も生徒もほとんど英語が話せない中でのスタートだった。

毎年参加する中で、少しずつレベルアップを図り、せっかく参加するのだから何をすれば良いかを考え、生徒が発表するプレゼンが毎年2つ以上になり、レストランでは必ず日本人は2人以下で外国人と一緒に食べる。観光するときは、生徒が自分たちで調べて道案内する。等の多くのルールが生まれた。一日の最後には、日記を2ページ以上書いていて提出するために、生徒もそれを見る教師も寝不足になりがちであるが、毎年立派な活動報告書が作られる。

2 参加者

今回の参加者は、高校生3名、中学生4名と引率教員の私であった。

出発の直前に、私に病気が見つかり、参加できるかどうか危ぶまれたが、少し無理をして参加した。

そのため、主催者のiEARN USAのメンバーにはご迷惑をかけた。

3 発表内容

生徒によるプレゼンテーションが2つ、（私の発表は体調不良のため中止）、キーノートスピーチでアジア代表として、生徒ひとりが発表。

（1）iPadを使った書道のワークショップ。

モロッコ大会から、書道のワークショップ

をしているが、紙を使うのを止め、iPadとApple Pencilを使って、やることにした。できあがった作品は、そのままiEARNのコラボレーションセンターの掲示板にアップすることにして、情報を共有することもできると考えた。しかし、生徒同士が「簡単にできる」と思い込んで、お互いの役割分担を考えていなかったため、バッテリー切れのiPadがあったりとトラブルが多かった。失敗したことが次につながれば価値がある。



写真1 書道のワークショップ

（2）教室の座席配置から教育を考えるワークショップ

海外6カ国で教育を受けた方が、国による机の配置を特徴的に報告している記事を見つけた。そこから、どの机の配置が一番良いのだろうか、各国の学生たちと討論するワークショップを開いた。

ただ、そこで開口一番にでた返答が、国によって違いがあるのではなくて、先生によっ

て違うから、同じアメリカでも決まってないよ、という言葉だった。実際、今回の世界大会の会場はアメリカの公立高校であり、日本のようにホームルーム教室に先生が出向くのではなく、教師がそれぞれ持っている教室に生徒が通うのだが、それぞれの教室は、設備は同じでも、机の配置は全部違っていた。

また、生徒たちも私も日本の全員が黒板に向かって先生の話聞く形式はダメなのではないか、という気持ちを持ってワークショップを開いたが、目的によって机の配置を換えるべきだという結論に至った。

例えば、ワークショップの最初の、イントロダクションでは、全員が前を向いた方が話に集中できる。そして、互いが意見交換をする場面では、円形などの向かい合った配置が良い。

生徒よりも、教師の役に立ったワークショップであった。



写真2 キーノートスピーカーの討論会

(3) キーノートスピーチ

15年にわたるアイアーン沖尚の活動に付いて、全体会の場で高校2年の大城が報告した。

普通は、授業単位で参加する iEARN 活動であるが、日本では教育課程がきっちり決まっているため、総合的な学習の時間であったり、学校以外のものであったり、教育の場に取り入れるのに工夫が必要である。私たちは部活動で行うことによって、中高一貫校の利点をい

く。次第に教師の出番が少なくなっている。教師は、活動の最後にアドバイスしたり、新しい情報やアイディアを知らせるだけで良い。

このような内容を発表した。非常に好評で、終わった後に、多くの方々から素晴らしい内容だったと声をかけていただいた。

大城の英語力も素晴らしいが、発表内容はほとんど大城が考え、他の部員がアドバイスし、教師は全く関わらずにできたことが最大の成果だと考える。

4 表彰



写真3 特別表彰

昨年の Virginia 大会は、ちょうど iEARN の 30 周年記念大会でもあった。その最後に、私たちアイアーン沖尚に特別表彰をいただいた。この表彰は、たくさんの中の1つではなく、Virginia 大会では、唯一の表彰だったので、とても名誉なこととであった。

5 2021年に沖縄で

残念ながら、今年 2019 年の世界大会は、開催国の準備が間に合わず、テレビ会議によるバーチャル会議となる。旅費はかからないのだが、日本は時差の問題が大きく、夜中や明け方になるため、生徒が集まれず、個人での参加が難しい。

来年の開催に期待し、また再来年の 2021 年には沖縄での開催を予定している。メイン会場は沖縄尚学高等学校である。私たちアイアーン沖尚の活動の集大成として、2021 年の沖縄に、是非、多くの人たちに集まってもらいたい。



13. “Girl Rising Project”の実践

— 高3年生選択授業・「国際理解」—

関根真理（啓明学園中学校高等学校）

2030年までに、国連で世界のすべての国々が達成すべき目標として掲げている持続可能な開発目標（SDGs）には、目標4「質の高い教育」と目標5「女性の人権」が17の目標に含まれている。SDGsは、「誰一人取り残さない」がキャッチフレーズになっており、女子教育の大切さは世界の人々と共に解決しなくてはならない目標となっている。

質の高い教育 女性の人権 SDGs 協同学習 課題解決力

1. はじめに

マララ・ユスフザイさんの勇気ある行動に共感し、新しいプロジェクトとして女子教育の大切さについて協働学習をしたいとiEARNのTeachers Forumに投稿したのが始まりである。2014年より、iEARNのEd Grager氏と共に、Girl Risingのファシリテーターとなり、女子教育の大切さを学ぶ機会を促進するための活動をしている。

2. 目的

Girl Risingプロジェクトは、開発途上国で女子がどのような境遇にあり、その中で教育を受けた女子がどのように変化し、周りに影響を与えることが出来るかを学ぶ。

3. 方法

参加するには、9ヶ国（カンボジア、ハイチ、ネパール、エジプト、エチオピア、インド、ペルー、シエラレオネ、アフガニスタン）の少女たちのDVD（映像）を視聴することから始める。DVDは、ファシリテーターのEd Grager氏に連絡を取ると送ってもらうことができる。どの国の映像をどのぐらいの期間を使って学習するかは、担当教員の判断による。ストーリーの内容と問題提起は国によって、それぞれ内容が異なるので、教員は全てのストーリーを視聴し、扱う生徒の年齢やテーマによってテーマを選択する必要がある。その後、生徒達はストーリーを視聴し、フォルダーの中に挙げられている質問に答える。勤務校では、フォーラムに自

分の意見や感想を投稿する前に、授業でストーリーで紹介されている各国の課題や情勢について、話し合う時間を設けている。テーマによっては、問題解決する為にどうしたら良いかを模索する。

フォーラムでは、他国の生徒とお互いに気づいたこと、学んだことを共有し、協働学習をすることによって、理解を深めていく。生徒同士はフォーラムへの投稿だけでなく、写真やビデオレターの交換などが可能である。互いの時間が合えばスカイプ会議を実施することも可能である。

4. 活動内容

2018年度は、高校3年生選択授業「国際理解」の生徒、24名がGirl Risingプロジェクトに参加した。プロジェクトを開始する数か月前から、iEARNのTeachers Forumで4月から一緒に活動ができる学校を募った。その結果、今回はアメリカ、ウガンダ、モロッコ、イスラエル、ジョージア、インドの高校生と協働学習をすることが出来た。「写真1」



「写真1 7カ国の生徒の協働学習」

カンボジア、ハイチ、ネパールの少女のストーリーを通して協働学習をした。特に時間を多くとったのは、ネパールの少女 Suma のストーリーである。Suma は、生まれた時から女子であるということで両親から差別を受ける。兄は学校に行って教育を受けられたのに対し、彼女は幼い時から他人の家に送られ、強制的に児童労働をさせられる。これは、現在も実在する“Kamlari”という風習である。違法となっても関わらず、親に借金があると現在も多くの女子が児童労働を強いられている。Suma は、幼い時から何件かの家で児童労働をさせられるが、16 歳の時に夜間に学ぶことが許される。その後、ソーシャルワーカーの協力で、Kamlari は違法であることを何回も訴え、ついには解放される。その後、Suma は同じ境遇にある女子が解放されるために、立ち上がる。

映像を観た後、生徒たちは、女子の人権が守られないのはおかしい、教育を受けられないのは不平等だ、ネパールの風習について他国は介入することができるのか、違法であっても継続されている風習について自国の人々はどうしたら問題を解決することができるかなどについて活発な意見交換をした。

6 月に、アメリカ、カリフォルニア州にある Sunburst Academy 校の生徒とスカイプ交流を実施することが出来た。「写真 2」



「写真 2 スカイプ交流」

スカイプ交流では、Girl Rising の内容だけではなく、両国の男女差別および児童労働の有無、教育の格差および高校生活の内容についても紹介し合った。さらに、お互いの国で流行っていること、文化の違いについての質問、将来の夢などについて共有した。

2 学期には、アフガニスタン、インドとペルーの少女のストーリーについて学び、1 学期と

同じように他国の生徒とフォーラムでそれぞれの考えを共有した。本校は、学習のまとめとして、11 月にポスター制作を行った。「写真 3」



写真 3 生徒のポスター

5 成果と課題

(1) 成果

Girl Rising の少女たちは、大きな困難の中にあっても諦めず、自分たちの夢を達成するために立ち上がり、行動する。その姿を視聴し、他国の生徒と意見交換することにより、生徒たちは勇気と力を得て、自分たちも何かしなければという思いになる。Girl Rising のムーブメントは、このプロジェクトに参加する生徒たちが力強い地球市民になるように力づけることの相互の繋がりも生み出すきっかけとなる。

本校では、課題解決のためにカンボジア支援を継続して行っている。2018 年に文科省主催で実施されたスーパーグローバルハイスクールフォーラムでは、「カンボジア裁縫プロジェクト」についてポスターを使って発表し、2 年続けて審査員特別賞を授与することが出来た。

もう一つの成果は、2018 年 7 月に iEARN 国際大会がバージニア州で行われた際に、バーチャルのプレゼンターとして Girl Rising の実践報告を行うことが出来た。報告会では、協同学習をした教員と生徒がその場で発表した。実際に渡米しなくても、ネットを通して会議に参加し、発表することが出来た。

(2) 課題

協働学習を充実させるためには、相手校とのスケジュール調整が要となる。生徒達の学びを深めるためには、感想を述べるだけでなく、授業での話し合い、批判的思考、課題解決力などが必要となる。そのためには、教師のファシリテーターとしての力が求められる。

大学実践編

(JEARN Youth Project)

14. Finding Solutions to Hunger プロジェクト

Future Teachers によるパキスタンの小学生への課外授業の実践

長谷川 早百合 (明治学院大学)

小学校教員を目指す明治学院大学心理学部教育発達学科国際教育コースの学生たちが、CLIL に基づいた必修科目「実践英語コミュニケーション」授業で iEARN の Finding Solutions to Hunger プロジェクトに参加し、パキスタンの小学生へ飢餓を乗り越えるヒントが込められた絵本を中心に課外授業の計画及び実践を行った。課題もあったが、その後の振返りで *Future Teachers* としての学びで最も多く上げられたのが対話の重要性であり、将来子どもたちにも体験させたいという意見が得られた。

国際協働学習

飢餓をゼロに

英語

CLIL

相互文化的能力

1 はじめに

「実践英語コミュニケーション」授業に iEARN を選んだ理由は二つある。

一つは、CLIL (内容言語統合型学習) の枠組みである 4Cs の統合 (池田、2016) に対応する要素を含んでいるプロジェクト型学習の国際教育ネットワークであること。二つ目の理由は、本コースの学生たちが将来携わる可能性のある小学校現場で iEARN を知っていると教育活動上の選択肢が広がると考えたからだ。

これらの考えをもとに iEARN *Future Teachers* と Finding Solutions to Hunger (FSH) プロジェクトのファシリテーターたちと話し合った結果、後述のプロジェクトに参加することになった。

2 目的

- (1) 将来の児童教育のために、学生が自ら iEARN を知り、体験する
- (2) FSH 内の授業案を利用しパキスタンの小学生へ英語の課外授業を計画実施する。
- (3) 活動の振り返りを英語で書き、FSH フォーラムに投稿する。

3 方法

学生への iEARN 紹介から授業計画、実施、英語の振り返り投稿までを6週間に渡って行った。パキスタンとの協働学習は3週目だった。

- (1) iEARN ファシリテーターよりパキス

タンの Bloomfield Hall School の先生の紹介を得る。

- (2) パキスタンの小学生の「飢餓をゼロに」教育の一環として日本の大学生が FSH Topic 9 Building Knowledge into Action の絵本 One Hen を使って 45 分の課外授業を行うことを先方の先生と決める。サブパートナーという位置づけである。
- (3) FSH の学生メンバー登録をする。
- (4) 全員絵本 One Hen を読む。
- (5) 45 分授業を分担し、各組がパートごとの授業計画に取り掛かる
- (6) 当日、小学生は早朝 7 時半に登校。スカイプでライブ授業を実施。
- (7) 学生の振り返りを英語にて投稿。



写真1 絵本 One Hen

4 活動内容

- (1) 授業計画

絵本 One Hen (写真1) は貧しい男の子が村

の貸付金システムを利用して一羽のにわとりを買うところから始まる。にわとりの卵を売り、飢えをしのぎ、徐々ににわとりを増やして貸付金を返済し、学校へも通い牧場の経営者へと成長していく話だ。この話を前提に45分授業をIntroduction(5分)、Hunger Quiz(10分)、One Hen Reading(15分)、Discussion Questions(10分)、Closing(5分)と分担し授業計画に取り掛かった。英語の SCRIPT も作成し言語準備を行った。

(2) 授業実施

授業開始前は大変緊張していた学生たちだったがスカイプを通して小学生たちを確認することで緊張がほぐれたようだった。Introduction組は日本語の挨拶を教え、世界地図の違いに気付かせ、初めて出会う者同士の授業の冒頭で和やかなムードを作り出した。Hunger Quiz組は三択クイズで飢餓のトピックへと導き、One Hen Reading組が練習の成果を発揮しながら読み聞かせを実施した。Discussion Questionsでは内容の理解度を確認し、児童の意見、提案を促し興味深い答えを聞くことができた。

(3) 振返りはパキスタンの小学生との国際協働学習、FSHの授業内容、Future Teacherとしての学びについて英語で書き投稿した。

5 成果と課題

(1) 成果。

1) 授業計画と実施

児童の反応や応える人数など予想できない要素が含まれていたものの授業は計画通り45分で終了した。パキスタンの子どもたちは集中して話を聞き前向きに参加し、飢餓について考えを深めさせる一つの機会となった。ファシリテーターの希望により授業案がFSH Topic 9のフォルダーに掲載されたので一定の評価を得たと考える。

2) 将来へ向けての iEARN 体験

国際協働学習とFuture Teacherとしての学びについて最も多く揚げられたのが対話の重要性であった。言葉のみではなく感覚的に相手

の存在を感じながら相手の話をじっくり聞いて考えを深めることが大切であると振り返っている。また、将来子どもたちにも興奮を味わせ、意見を交わす機会を作り、リアリティーに近い体験をさせたいという意見も得られた。

3) iEARN の国際協働学習の柔軟性

今回のFSHプロジェクトでは通常よくある同年代同士の協働学習ではなく“先生”と生徒として異なる立場の関係での参加であった。しかし、異なる立場であっても同じ授業を通じて対話によって構築される学びは確実にあった。柔軟な国際協働学習の形がとれることはiEARNならではの成果と考え最後に付け加えたい。

(2) 課題

1) 時間

学生に与えた準備時間が短かくパートごとに話し合う時間はクラスではほとんどとれなかった。授業は成り立ったが、飢えについての知識、パキスタンの教育や英語の発音、読み聞かせの音読指導などほとんど深められないまま協働授業を行ったため不満に思った学生もいたはずだ。

2) 技術面

技術的問題としてスカイプの音声があった。相手の反応が一拍遅れて入ってくる上声が反響し、児童の意見が聞き取りにくく相手の先生がゆっくりリポートするという場面が少なかつた。活発なやり取りができず残念だった。学生がクイズの三択やディスカッションの質問を紙に書いていたのは功を奏した。文字を使う手段を準備段階で検討すると良いと考える。

謝辞: 本活動に明治学院大学心理学部の渋谷恵教授のご支援とご協力があったことに感謝したい。

参考文献

池田誠、渡部良則、和泉伸一(共編)(2016)「CLIL(内容言語統合型学習)上智大学外国語教育の新たな挑戦 第3巻授業と教材」

15. 大学を拠点とした Holiday Card Exchange プロジェクト

短大生ファシリテーターと小学生との国際協働学習

栗田 智子 (JEARN Tokyo Youth Project)

Youth Project として、実践女子大学・実践女子大学短期大学部と連携し、小・中学生を対象とした Holiday Card Exchange プロジェクトのワークショップを行った。アメリカ、ロシア、ベラルーシ、ポーランド、モルドバ、台湾の6カ国8校と手作りのホリデーカードを交換し合い、小・中学生は、世界の文化の多様性と異文化コミュニケーションを体験した。大学生は、ワークショップの企画運営と小・中学生のプロジェクトのファシリテーターを体験することにより、国際的視野とコミュニケーションスキルの成長が見られた。

国際協働学習 プロジェクト学習 異文化理解 大学 NPO 連携 ホリデーカード

1 はじめに

Holiday Card Exchange プロジェクトとは、世界の子どもたちがホリデーカードを書き、互いに交換し合うグローバルプロジェクトで、このプロジェクトを通し、日本の文化や世界の文化の多様性を学ぶことができる。2016 年度から、実践女子大学・実践女子大学短期大学部教育プロジェクトと連携し、短大生が、ファシリテーターとして、このグローバルプロジェクトに参加し、小・中学生向けワークショップの企画と運営に参加している。

2 目的

- (1) 自国と他国の文化を相互に学び、異文化コミュニケーションへの興味、国際的視野を育てること。
- (2) 大学生が、国際協働学習のワークショップの企画運営を通じて、国際的視野を養い、協働によるコミュニケーションスキルの向上をはかることである。

3 方法

- (1) ワークショップ企画：
「世界のお友達とホリデーカードを交換しよう！～Holiday Card Exchange Project 2018」
- (2) 企画・運営：実践女子大学
学生・短期大学部学生 22名

学生たちはワークショップの準備を通してカード交換国への知識と関心を深め、それを子ども達に伝える方法を考案する。ワークショップ当日は子ども達へのファシリテーションに加えて保護者や付き添い者への対応も行う。

3) 活動期間：2018 年 9 月から 1 月まで

4 活動内容

(1) 全体の活動内容

- | | |
|------|------------------------------------|
| 9 月 | 活動開始・チーム分け・活動目標と計画の策定 |
| 10 月 | 文化祭に向けた準備・イベント申込者への事前学修教材作成 |
| 11 月 | ワークショップ準備・クイズ作成・ワークショップでのファシリテーション |
| 12 月 | 海外から届いたカードの翻訳とポスター作成 |
| 1 月 | イベント準備・ワークショップでのファシリテーション |

(2) ワークショップの内容

- 1) 第1回：2018 年 11 月 17 日 (土)

参加者 小学生 9 名

- ① パートナー校の国についての事前学修教材に関連したクイズに答えながら、子どもたちは、パートナー校の6カ国を確認する。
- ② パートナー校から届いたビデオレ

- ター（自己紹介、学校紹介）を鑑賞。
- ③ 日本から送るビデオレターの撮影。お正月に関する物を一人1点持ち寄り、それを英語で紹介する。「お正月」の歌を合唱。その様子を大学生が撮影し、後日ビデオレターに編集しパートナー校にメールで送付。
- ④ 海外に向け、ホリデーカード（年賀状）を自由に描く。後日学生が海外に郵送する。

2) 第2回：2019年1月26日（土）

参加者 小学生4名

- ① 海外のパートナー校から届いたホリデーカードを鑑賞する。事前に大学生が作成したホリデーカードの翻訳と現物のカードを見ながら、国ごとに気づいたことをアークシートに記入する。
- ② グループで、気づいたことを共有し興味を持ったことをタブレットで調べる。グループで気づいたことや調べてわかったことを模造紙にまとめ発表する。



図1 ワークショップの様子

5 成果と課題

(1) 成果

プロジェクト学習のファシリテーターとして、昨年以上に学生が主体的に工夫し、取り組んだ。小学生も自ら問いを持ち、タブレットで調べる姿が見られた。ホリデーカードの交換だけでなく、ビデオレターの交換も早い段階でできた。子どもたちは英語以外の言葉にも興味を示し、パートナー校の母国語を書いて送った。それがパートナー校にとっても喜ばれた。

学生の活動内容に沿ってループリック調査

における評価項目を設定し、調査を実施した。結果（実践女子大学短期大学部 大塚みさ教授まとめ）は、【国際的視野-1 日本の文化への理解と関心を深め世界へ発信する】【同-2 カード交換国への知識と理解を深め、子ども達に伝える】の伸長度がともに+1.33と最も高く、【行動力-1 目標を設定し、計画及び企画を立案実行できる】【同-2 課題を発見し、問題解決につなげる】がそれに続く。

表1 ループリック調査結果（大塚教授）

項目	事前 (9月)	事後 (1月)	レベル差 (後-前)	レベル1	レベル2	レベル3
【国際的視野-1】日本文化への理解と関心を深め、世界へ発信する	2.19	3.31	1.33	2.19	3.31	3.31
【国際的視野-2】カード交換相手国への知識と理解を深め、子ども達に伝える	2.05	3.35	1.33	2.05	3.35	3.35
【協働力-1】メンバー間でのコミュニケーション	2.81	3.24	0.50	2.81	3.24	3.24
【協働力-2】来場者とのコミュニケーション	2.43	2.94	0.63	2.43	2.94	2.94
【行動力-1】目標を設定し、計画及び企画を立案・実行できる	2.24	3.29	1.13	2.24	3.29	3.29
【行動力-2】課題を発見し、問題解決につなげる	2.00	3.00	1.06	2.00	3.00	3.00

事後の学生の自由記述の感想では、「自国について考え、知識を高めることで、海外への視点も変えることができた。」「ネットで国旗の意味などを調べたり、子どもたちに伝わりやすいように簡単なクイズを考えて工夫を凝らしたりして完成させることができた。」「外国について調べたり、理解を深めたりしようとした。また仲間と話し合ってコミュニケーション力もつけることができた。」「など主体的、意識的に活動した結果自信をつけたように思われる。

小学生の感想は、第1回ワークショップでは「いろいろな国の新年の挨拶の書き方を知れた。」「とにかく楽しかった。」「作るのが大変だったけどうまくつくれた。」、第2回ワークショップでは「5か国との交流で、知らないことがたくさんあった。その国の良さが知れてよかった。」「いろいろな国の食べ物や、過ごし方が知れてよかった。」「まとめるのが楽しかった。自分の知らないことがたくさんあった」であった。今まで知らなかった国の言葉や生活への関心が深まったようである。

(2) 課題

今年は、土曜日開催と風邪の流行により、小・中学生の参加が少なかった。より多くの子どもたちが、2回通しのワークショップに両日参加できるよう、日程や募集方法を工夫したい。

16. 国際理解教育の導入としての「100人の村ワークショップ」の役割

Kanazazawa youth project

霞流 蛍（金沢星稜大学人間科学部こども学科 3年）

荒川 佳帆（同上）その他4名

国際理解において世界の現状を知り、尊重することは重要である。そこで総合的な学習の時間において、児童の世界に対する興味や関心を高めるために「100人の村ワークショップ」を行う。その事前練習として、大学生70名を相手に実施した。結果、ワークショップを行う前は世界に関して興味がなかった学生も活動後には、気持ちが変化し、世界についてもっと知りたいと意欲的な学生が多く見られた。

ワークショップ 国際教育 導入授業

1 はじめに

小学校での総合的な学習の時間で「国際教育」を取り上げた際、課題を設定するための共通体験として、世界の国の一員となって体験できる100人村ワークショップを行う。

2 目的

国際理解教育の導入として、参加者に興味を持ってもらうための体験。この体験から、世界に目を向け、今まで知らなかった世界の現状について知るきっかけを与える。

3 方法

このワークショップは「世界一大きな授業2019」と「世界がもし100人の村だったら」という本を基に、計画・実践した。本来は、小学生に向けたワークショップであるが、今回はその前段階として大学生を相手に行った。そこでの反省をもとに、後日小学生を相手に実践する予定である。

4 活動内容

（1）自己紹介 清水ゼミの6名がカタル、韓国、日本、カンボジア、フランス、中国のそれぞれの国の特徴を表現した服装をし、それぞれの国の言葉であいさつをする。



（2）クイズ 世界の人口や教育に関するクイズを出題し、参加者に答えを考えてもらう。

（3）識字率 クイズの最終問題で世界の大人の識字率について確認した後、文字が読めないという状況を清水ゼミの学生が寸劇で表現する。3パターンの文字が書かれた葉の中から、1つだけある本物の葉を選ぶという内容だ。参加者にも実際に予想してもらい、文字が読めないことで命の危険にもつながるという恐ろしさを体験してもらう。

（4）男女の比率・世代別 ここから、参加者一人ひとりにカードが配られる。そこには国・性別・世代等が記載されていて、一人一役が与えられる。そのカードに基づいて、分かれ、世界の男女の比率やお年寄り・大人・子どもの比率を自ら動き、実感する。

（5）世界の挨拶 すでに持っているカードに記載されている自分の国の挨拶のみを話して、同じ言語を話す人を探すという活動。日本人は2人しかいない。ここでは、言葉が通じないということが不便であること、3割の人が英語を話せることから、英語を学ぶことは大切だということを感じるきっかけにつなげる。

（6）地域ごとの人口 大陸の面積比に応じたひもで輪を6つ作り、6大陸を表現する。カードに記載されている自分の地域の場所へ移動し6つに分かれる。アジアは非常に人口が多いこと、反対にオセアニアは人口が1億人にも満たないことに気づかせ、世界の人口の偏りを理

解させる。

(7) 貧富の差 役割カードに従って、富裕層・中間層・貧困層のグループに分かれる。飴をそれぞれの豊かさに合わせて分配したものを渡し、グループ内で分けさせる。3つのグループの一人当たりの飴の数を比較し、世界全体の富の分配がどのくらい不公平であるかを体験させる。

以上が活動の流れである。このワークショップを行った後、参加者の大学生約70名にアンケートを実施した。そのアンケート結果から、この活動の中で1番印象に残ったのは、(5)世界の挨拶ということがわかった。理由としては、参加者全員が主体的に、自ら発言をしたり参加者同士で交流したりすることができたからであるとみる。また、(7)貧富の差の活動の中で、「富の再分配で知恵は出せたか？」という質問に対して、出せた/少し出せたと答えたのは、全体の59%であった。つまり、残りの40%は消極的な回答であったということから、分配時の声かけや、他チームの様子を伝えるなど改善すべき点は多くあると感じた。

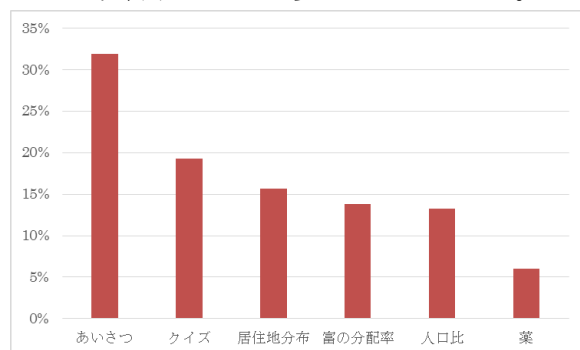


図1 100人村で印象に残った活動

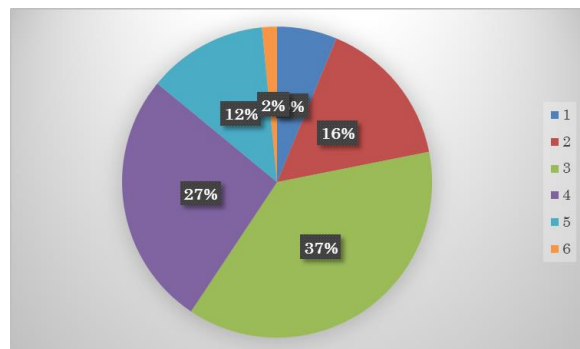


図2 富の再配布で知恵を出せたか

(1-3 がプラス評価。4-6 がマイナス評価)

5 成果と課題

(1) 成果

アンケートの項目、(6)ワークショップ後に自分の気持ちや考え方で変わったことはありましたか？という質問に対し、「はい」と答えたのは、全員であった。「たくさんの人が世界の現状を知り、向き合うことが大切だと思った。そうすることで、『援助したい』と思う人が増えると思った。」という感想が中にあった。この感想のように、まずは、世界について知ることが大切だ、ということを知ってもらえたのではないかと感じる。活動前は、世界の問題に関心がなかった人も、活動後に気持ちが変わっていたため、この活動を行う意義があったと思う。私たち清水ゼミがこの活動を通して伝えなかったことが、参加者の皆さんに伝わったように思う。

(2) 課題

今回は大学1年生70名を相手に実施した。次回からは100名を超える小学生を相手に実施する。そのため、小学生にもわかる簡単な言葉選びが課題になる。難しい内容を解説する際、分かりやすい例えを挙げながら説明をしたり、身振り手振りをしながら話したりと、ただの解説にならないようにしたい。また、今回よりも、人数が多いため、カードを配る際や、子どもたちを並べる際の工夫等、考えていかなければならないと感じた。大学生相手と小学生相手ではまた違うので、臨機応変な対応が求められるだろう。

小学生は6月におこなうこの100人村ワークショップのあと、テディベアプロジェクトを始める。世界について知ることが大切だと感じた後に、実際に知ることができる相手として台湾の小学校とのテディベアプロジェクトを紹介する。始めにテディベアプロジェクトありきではなく、「子供のもっと知りたい、やってみたい」という思いこのワークショップで書きたてる中で、自然とテディベアに持っていきたいと考えている。

17. テディベアプロジェクト支援で台湾訪問

—台湾の3つの小学校訪問記—

新出 真奎 他7名（金沢星稷大学人間科学部 4年）

テディベアプロジェクト 国際交流 台湾訪問 国際協働学習研究会

金沢星稷大学清水ゼミでは、金沢市内の小学校の国際交流プロジェクトを支援している。金沢の小学校3校の交流先である台湾の3つの小学校を訪問し、金沢の紹介をおこない、金沢の小学生から託されたミッションをおこなってきた。

1 ねらい（文責：高尾好）

清水ゼミでは3年生が主体となって金沢市内のテディベアプロジェクトに参加している小学校のサポートを行っている。サポートにあたり、本大学を拠点に、月に一度の頻度で小学校の先生方を集め「国際協働学習研究会」を開き、テディベアプロジェクトにおける段取りや予定の確認、近況報告や問題点などを話し合う場を設けるほか、現場に立つ先生方同士の交流の場として活用してもらっている。本年度は金沢市立大野町小学校、四十万小学校、額小学校に参加していただけることになり、計6学級の先生方とのご縁を持つことができた。サポートにあたった大学生たちを中心に、ただ作業的に台湾と関わりをもつのではなく、交流相手国となっている台湾について学生もよりリアルな台湾を知るために台湾教育研修を行った。

2 テディベアプロジェクトについて

テディベアプロジェクトとは、iEARN という NPO の団体が企画・推進する国際交流プロジェクトである。それぞれの団体から留学生に見立てたぬいぐるみをペアとなった相手校と送り合い、ぬいぐるみの目線で生

活体験や文化体験を留学先から報告することで異文化理解を促すことを目的としている。世界各国からの参加があり、基本的には iEARN の「フォーラム」という名の掲示版のようなページでのクラス担任同士、参加団体同士のメッセージのやり取りが可能である。ベアの日常生活の様子を載せる際にもこの掲示版を活用することができる。

3 台湾との交流開始

今年も額小学校にお願いして6年2組のテディベアプロジェクトの様子を見学させて頂いた。この先生は昨年から引き続き6年生の担任をされており、今年度新たに額小学校6年生3クラスから大学生たちに出されたいくつかの「ミッション」に挑戦してほしいとの要望もあった。

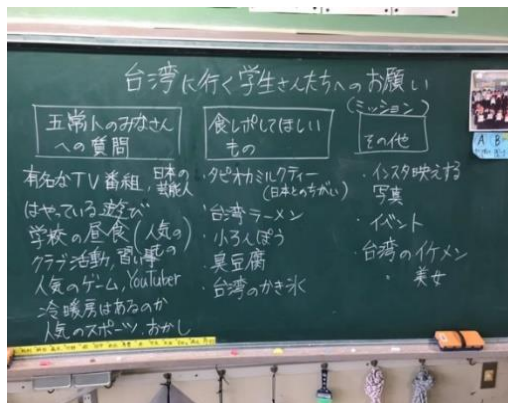


写真2 6年2組のみんなからのミッション

今年は3クラスとも台湾の小学校とのテディベアプロジェクトであり、1組、2組、3組それぞれ担当の学生が食べ物について、人について、文化についてなど様々なミッションを託されていた。

台湾に実際に旅立つ前には額小学校6年生それぞれのクラスではアプリケーション「LINE」を用いてテレビ会議も1、2回行っており、児童らも台湾の小学生と英語での自己紹介やコミュニケーションに戸惑いながらも挑戦していた。

4. 台湾の小学校訪問

2019年1月に台北市の五常小学校、嘉義市の精忠小学校、高雄市の新甲小学校に訪問。

4-1 五常小学校（文責：奥名香渚）

4-1-1 学校の雰囲気

小学校に着くと、校舎の大きさに驚いた。四方に囲まれた4階建ての校舎の真ん中には、クレートラックや、芝生、バレーボールのネット、バスケットボールのゴールなどがあった。廊下の天井は歩いているとだんだん色が変わり虹色になっていて、校舎の外壁にも、いくつも気球が描かれており、鮮やかでわくわくする校舎だった。

各クラスは、担任の個性が発揮されているクラスづくりになっていた。私が最も素敵だと感じたクラスは、先生を船長、児童を乗組員として例え、「一緒に海底を探索するように、様々なこと学んでいこう。」という目標のクラスづくりをしていた。また、クラス内の係を日本だとグループごとに分担するが、台湾のそのクラスは、1人1人の写真と共に、1人1人に違った係があり、責任感やクラス内での自分の存在を感じることができて良いと感じた。係の内容も、「国語の

授業での、サブ先生係」「体育の授業でほめる係」など、クラス運営のために役に立つだけではなく、子どもに達成感が大きくあることや、人間関係も良くなり工夫とユーモアを感じられる係であった。



写真3；クラスの係分担の掲示物

4-1-2 五常小学校 交流校クラス

教室の後ろには、「国際交流」と大きく書かれて、金沢の額小学校とのペア児童同士の写真や自己紹介の手紙などが大きな模造紙に貼って掲示されていた。私たちが、台湾の児童に日本の文化を紹介していると、写真を見て「ふじさん！」と答えることができ、日本のアニメの妖怪ウォッチのオープニングのダンスも多くの子が知っており、楽しく踊ることができていて私自身も、日本のものが台湾にこんなにも広がっていることに驚いた。そして、台湾の小学生がたくさん日本のことを知っていたのはテディベアプロジェクトで日本と繋がることで日本の文化を紹介してもらって知ったり、普段の生活にある些細な日本との結びつきにも敏感に反応し、知ろうとしたり、自分で調べるからであると考えた。台湾の児童に会って、より、テディベアプロジェクトは児童の外国への興味の動機付けになっていることを実感できた。

4-1-3. 五常小学校 1年生の英語の授業

英語の授業を見て、まずレベルの高さに驚いた。先生は、すべて英語で授業を進め、1年生とは信じられないほど児童も頑張って発音や質問に答えるなど、しっかり授業についてきていた。その台湾の児童は、日本の児童よりも意欲的に楽しんで参加しているため、私が台湾の英語の先生に「日本の児童は、英語の文法などが難しくなると英語を苦手と感じてしまうのですが台湾では？」と、尋ねると、「児童たちは、英語の文法を先生との会話の中で楽しみながら学んでいるので、英語を苦手と感じることは無い。」と、答えてくださった。つまり、文法を知識としてではなく、必然性のある場面設定をすることで、自然と使いながら楽しく学ぶまた、楽しんで英語を話せるようになるのだと感じた。



写真4；小学1年生の英語の授業の様子

4-1-4 五常小学校 先生方との懇談

お昼の時間に、先生方と学校で昼食を食べた。そして、その後先生方と懇談をさせていただいた。

台湾の小学校の規模や、先生と児童の長期休みの長さなど、日本との違いは多くあったが、ICTが豊富に活用されている教育環境がとても素敵だと感じた。児童 950 人に対して 400～500 台ほど iPad があり、2 人で 1 台ほどの数が学校にある。また、授業

を行っているほとんどの教室は、前の黒板が 4 つに分かれており、真ん中の 2 つをスライドして開けると、大きなタッチスクリーン画面ができてきた。英語の授業も、そのスクリーン画面ですぐに画面の教科書のページをめくれたり、動画を再生したり、戻ったり繰り返して学習することができ、児童も集中力を維持したまま授業ができると思った。

また、英語学習面の話もさせていただいた。比較的、塾に通っている児童が多いため、学校の英語は簡単だと感じている子が多いと話していた。そのため、家庭環境で英語が、できる子、できない子が分かれてしまうため小学校でも 4 年生から英語の授業のクラス分けを行っていた。「高レベルクラス」は、ハイレベルな英語の授業を受け、「中レベルクラス」は、教科書どおりに基本的な内容を学習し、「低レベルクラス」は、前の学年の範囲も復習しながら、中レベルクラスに追いつくことを目指した学習をしている。訪問した五常小学校では、英語の先生が 6 人いるため、多くの先生が刺激を受けながらよい英語教育を学校全体で進めやすいと考えた。

校長先生が、校長室に案内してくださると、そこでは、児童たちが書道を学んでいた。台湾では国策で書道を薦めており、校長先生も得意としていたため直接児童に教えていた。クラブ活動のような活動で、校長先生と児童が関わることでできていて、とても過ごしやすい雰囲気为学校だと感じた。

4-2 精忠国民小学校（文責：上 茱宥）

4-2-1. 精忠國民小学校訪問

台湾に来て 4 日目、7 時に起床し、泊ま

っていたホテルからタクシーを使って交流校の1つである精忠國民小学校を訪れた。まず始めに驚いたのは学校にあるオブジェや外観だ。入り口には大きなロボットが立ち、壁にはカラフルなタイルで可愛らしい模様が施されていた。



写真5 精忠小デザインがおしゃれな壁まさにインスタ映えな学校だと感じた。1年を通して温暖な気候である台湾の小学校はどこも、日本の小学校とは違って壁がなく吹き抜けの校舎となっており、廊下も非常に広く開放的であった。壁がないことで様々な危険が伴うのではないかと思ったが、児童らは校舎の端と端で手を振り合うなどのびのびとしており実に楽しそうであった。

精忠國民小学校では2クラスで我々のワークショップを行わせていただいた。日本の文化や、日本の小学生の生活の様子などを紹介した。休み時間に何をしているのか聞いてほしいという日本の小学校の児童からのミッションがあったため聞いてみると、ドッジボールやバスケットボール、歯みがきなどがあった。驚いたのはオカリナを演奏するという予想外の答えが返ってきたことだ。日本の小学生がリコーダーを習うのと同じように台湾の小学校ではオカリナを習うそうだ。演奏を披露してくれた

が、とても綺麗な音色で感動した。

ワークショップを終えると、1年生の英語の授業の様子を見学させていただいた。台湾では1年生から週に2〜3回の頻度で英語の授業が行われるのだ。カナダから来た先生の話す英語を聞いて、これを1年生が聞いて理解しているのだと思うと驚い。日本の小学校でも英語教育が年々重要視されてきているが、台湾のように1年生という早い段階で本格的に英語に触れていくのもいいと感じた。

4-2-2. 実に高クオリティー英語施設

午後から精忠國民小学校の先生方の案内で英語施設を訪問させていただいた。英語を使って体験的なシミュレーション学習ができる施設ということで、施設内にはホテルのフロント、空港、ダンススタジオなど様々なブースがあった。全てのブースを体験させていただいたが、非常に楽しく、これなら英語に苦手意識を持ちにくく、児童も深い学びを得られると感じた。日本にはなかなかこのような大きな規模の英語施設はないと思うので是非取り入れてほしいと思った。

4-2-3. 夕食 with 精忠國民小学校の先生方

夕食会場までは歩いて向かった。その際に檜意森活村（グエイイーセンフオツン）という嘉義市の文化施設に立ち寄った。木造の建物が並び、日本の古い町並みが再現されていた。台湾で有名なパイナップルケーキやその他お土産などが売られていた。そしてなんと、驚いたことに「金沢」と書かれた暖簾のかかった建物があったのだ。そこでは金箔ソフトが売られており、台湾で金沢を見つけられたことに感動した。

夜は精忠國民小学の校長先生、交流クラ

スの先生方と夕食をとった。中華料理屋さんにあるようなターンテーブルにどんどん豪華な料理が運ばれてきた。食べても食べてもなくならなかった。どれもおいしく最高の気分であった。

4-2-4. 精忠国民小訪問を振り返って

小学校・英語施設・台湾の街並み、全てで発見の多い1日であった。特に小学校では設備や児童の生活の様子に日本の小学校との違い・共通点を見ることができ、自身の学校教育や児童観また英語教育に対する考え方や視野を広げることができた。また現地の先生方と長い時間を共にしたことで自分の英語力を確かめることもできた。交流する中で自分の英語の語彙力や表現力が十分でないことから上手くコミュニケーションをとれない場面が多くあった。これらの経験から自分の英語力はまだまだ足りていないことが分かったためさらに自分自身の英語力を高めたいと思った。自分なりの新たな課題を持つことができ、とても有意義な1日となった。

4-3 高雄市新甲小学校（文責：角出彩佳）

4-3-1 新甲小訪問

台湾研修での小学校訪問は新甲小学校で3校目である。まず、学校に着いたら子どもたちが歌を歌って出迎えてくれた。そして、金沢市立大野町小学校と交流している5年9班のクラスに入った。教室の後ろの椅子に座り、初めは子どもたちが台湾のこと、高雄市のこと、についてプレゼンをしてくれた。有名な食べ物である、黒い卵とパイナップルケーキを紹介する際には、試食まで準備をしてくれていた。じつは黒い卵は子どもたちは好まないらしい。



写真6 金沢紹介のプレゼン

次は私たちがプレゼンをした。はじめに大野町小学校の子どもたちが書いたクリスマスカードを手渡した。とても喜んでた。次に、大野町小学校の紹介動画を説明しながら流した。反応が大きかったのは掃除の動画。「おお〜！」と驚いた様子だった。妖怪ウォッチのダンスもみんなで踊った。台湾の子どもたちは生き生きとしていて、とても楽しく踊っていたので、私も嬉しかった。最後に日本の遊び「福笑い」をした。はじめに、「up」「down」「right」「left」の英語を使って学生がやり方を示した。子どもたちは目をつぶりながら、グループで楽しそうに遊んでいた。台湾の子どもたちにとって、初めてする遊びであり、こうやって日本の遊びをする経験は、新鮮な感じがした。

その後タピオカミルクティーを飲みながら、先生方と懇親会をした。1人ずつ自己紹介をしたあと、私は交流している学級の担任の先生と話をすることができた。高雄市の有名なものや、給食の人気メニュー、人気の日本食やアニメ、学級の子どものことなど、たくさん質問することができた。こうやって台湾の小学校の先生と実際に会って話をすることは非日常的で、英語私にとっていい経験になった。

5. まとめ (文責：新出 真奎)

今回のテディベアプロジェクトは、児童に海外というものについて視野を広げてもらうこと、平和を願う気持ちについて考えてもらうことなどを主な目的として日本の小学校、台湾の小学校、そして金沢星稜大学のメンバーで進めた。

協力してくれる学校にお願いし、交流校について決めた後、ベアを送り、お互いの国の生活を体験してもらった。その中で文化についての興味を持たせたり、テレビ会議では英語を実際に使ってみせたりすることで英語に対する興味関心を持たせるなど、協力して下さった先生方の多彩な手立てにより、こどもたちに楽しみを沢山与えるような内容であった。より良いものにしていくために、双方の先生方先生方は盛んにLINEで交流し合い、進め方を確認したり、お互いの様子を伝え合ったりしていた。私たち大学生は、このお互いの交流のさらなる加速を目指し、橋渡しとして英語のサポートや先生方との連絡などを行った。また、実際に台湾に実際に渡航し、台湾の小学校での活動の様子を視察するなどして、日本の小学校に報告を行った。

企画から、活動の実施、成果の報告会までを終えた今、テディベアプロジェクトは、国際理解や英語を学ぶことにおいて、その学びの入り口になったと感じている。

テディベアが海を渡って自分たちのもとに届き、向こうにもわたったと分かった時のうれしさや、お互いにベア大事に扱ってくれているといううれしさ、言語の壁を越えて気持ちを伝えることができる喜び、などといったことが、子供たちには本当に大きい財産となったようである。本格的に平

5-1 テディベアプロジェクトを終えて

和を願う気持ちや国際理解について学ぶ、大きな土台となったといえる。子供たちが興味を膨らませている様子を見たり、聞いたりしながら、学生の私たちは同じく平和について考え、また、自分自身が教員となったときに同じく国際理解のための手立てについてたくさん考えることができたのではないかと考えている。台湾に渡航した後、その様子について小学校に報告しに行った後の子供たちの感想から、一部を紹介する。

「台湾の文化や台湾の人の夜の過ごし方も知れたので良かったです。いつかぼくも台湾に行っているいろんな食べ物を食べたり台湾の文化を見てみたいです。」(四十万小学校Nさん)

「さいしょは台湾にきょうみはありませんでした。でも授業を受けてからきょうみをもちました」

(大野町小学校Mさん)

5-2 今後の課題について

今回のテディベアプロジェクトでは、今年度から新たにテディベアプロジェクトに参加することになった台湾の小学校との初めての交流があった。このプロジェクトを進めるにおいて、小学校同士の関係づくりは必要不可欠である。先生同士の豊かな関係作りこそが子供たちの豊かな経験にもつながっていく。先生同士の交流にはLINEを使用した。使い勝手の良さから、各校ごとに盛んに交流が見られた。普段の様子から、テレビ会議での内容について、ビデオや写真を多く送りあう様子が見られた。だからこそ、台湾での活動についても大学生は子供たちからたくさんのミッションをもらうことができ、それに基づいてたくさんの学び

を還元できたかなと思っている。

しかしながら、その交流は閉鎖的であった。各担当の先生と清水教授、そして大学生がグループに入ったが、それだと、同じ学校で勤務する先生同士での交流はできても、違う学校の先生同士ではなかなか交流が大変になる。ほかの先生がどのような交流をしているかを参考にしながら活動を進めていくことで、問題点の共有ができ、全体の活動の活性化にもなる。ところが、日本の先生方は月に1度会議の場を設けていたものの、台湾の先生同士の交流の場までは設けることができなかった。改善策としては気軽に会話などができるツールを利用しながら、全体で意見の交換や共有ができるように場を作っていくことが必要だと考える。

以上のことから、先生同士の関係の構築に関してはさらに良くしていけると考えている。それによって、子供たちの興味関心にも大きく影響があるだろう。

6. まとめ

文部科学省は、次期学習指導要領において「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される」とした。その上で小学校期間において身につけさせたい力について明確化することで、これから速いスピードで変化していく社会にも対応していける子供の育成を図る。

その中で国際理解教育、異文化理解教育に関しては主に社会、総合などで国際分野を学ぶところでの実施が主になる。外国語教育に関しては2020年度から実施されることが決定し、これらは社会の動向を見て

もとても重要な分野になるだろう。

そのような現代教育において、教員はいかに子供たちに実感を持ってこれらのことを考えてもらうかが重要である。ただ、子供自身で考えるにも、教員からの押し付けでその力は養われるものではない。自身で必要性をもって考えるようになるには、そうなるきっかけが必要不可欠であろう。そしてそのきっかけ作りこそが教員の大事な仕事である。

私たち大学生はこのプロジェクトを支援して行きながら、実際に活動を進めていく先生の姿を間近に見た。そこで見た先生一人一人の考え方は違うなと感じながらも、根底にあるのは子供たちに国際理解について考えてもらいたいという熱い思いで相違なかった。それを思わせる出来事があった。

毎月開いていた日本の先生方と大学生を交えての会議が最終回を迎え、皆で反省点やこれからの課題について議論し、いよいよ会議も締めめの時間になったとき、ある先生が「まだまだだな」ということを漏らしていた。私はその先生のクラスで交流をさせていただいていたが、皆が楽しそうに活動しているし、私が台湾の報告に行った時も感想をたくさん述べてくれる子供たちだなと思い感心していた。いい活動になっていると私は思ったが、その先生にとってはまだまだ課題が残ったかもしれない。

この姿を見て私は驚いた。先生自身が一番に課題についてずっと考えてのかということ考えると、私はまだまだだなと思った。ただ、本気で子供たちのことを考えることができる教員という仕事は本当に素敵だなとも思った。

このプロジェクトは国際理解について考

えてもらいたいという様々な方の思いのもと成立したものである。その当たり前のように当たり前でない、この会にメンバーとして参加できたことを心から嬉しく思う。私は学生の立場であったが、子供たちにたくさんかかわることができ、プロジェクトの一員としてサポートに尽力できた。私自身の課題はたくさんあるが、この経験こそ貴重な財産だと思い、未来の子供たちにさらいよい活動を届けられたらいいと思う。

清水教授をはじめ、一緒にプロジェクトを盛り上げてくれたフィールドの仲間、先輩方、協力してくださった日本と台湾の小学校の先生方、またこの活動でお会いしたすべての方に感謝したい。

7. プロジェクトメンバーの感想より

○小学生は、台湾と日本の同じところ、違うところにもものすごく興味を持っていると気づいた。また英語を使う必要性を、見て感じる場面があると、子供たちも英語の勉強に意欲がわくと思った。(奥名香渚)

○テディベアプロジェクトを行っている子供たちや先生方と関わったことで、異国の文化や習慣を知る楽しさを実感することができた。自分が教員になった時にも積極的に国際交流を取り入れていきたいと思う。

(棚田千夏)

○子供たちにはもちろん、学生にとっても勉強であった。長期期間で活動をしていく中でこそ、「どのようにしたら子供の学びにつながるか」ということを考えて行動できた。同時に英語教育の重要必要性を改めて感じた。(上茱宥)

○当たり前のように日本の教育を受けてきているので、海外の教育について知ったと

きは驚いた様子だった。子供たちにとっては刺激になったのではないかと思う。

(角出彩佳)

○「誰かに伝える」経験を自分自身が積むことができ、人前で話すことに慣れ、自信がついた。また、今回の経験で現場の先生とも仲良くなることができ、先生自らが交流を楽しむ姿を見て、教員になったら自分のクラスで国際交流をしたいと思った。

(中川恵美)

○二回目の台湾に行くことができ、様々は発見があったので、自分の視野が広がったと感じた。英語で話すことは苦手であったが、伝えようと努力することで伝わったのがうれしかった。伝えようとする気持ちが大切だと思った。

(金本彩希)

○去年台湾に行った際とはまた違うことに気づくことができた。日本人を好いてくれる人が多い台湾には、多くの日本人が足を運んでももらいたいと思った。(高尾好)



写真7 孔子廟で願い事

ここは孔子が祀られているところ。とても静かで広いところだった。ここで、教員採用試験の合格祈願をした。みんなそれぞれ他の願い事をしている人もいた。願うことで教員になりたいと再確認！